

— 津和野幼花園改築工事に伴う発掘調査報告書 —

# 津和野城下町遺跡4・5 殿町地区I

2010年3月

島根県津和野町教育委員会



カトリック教会



旧津和野幼稚園

## 例　　言

1. 本書は、平成20、21年度（2008, 2009）において、社会福祉法人 聖心の布教師妹会の委託を受け実施した津和野幼花園（私立保育園）改築工事に係る「津和野城下町遺跡4・5」の発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導　　島根県教育委員会文化財課  
津和野町文化財保護審議会会長　　松島　弘

事務局　　津和野町教育委員会 教育長　　齋藤　誠  
　　　　　　教育次長　　廣石　修  
　　　　　　文化財係　　米本　潔

調査員　　津和野町教育委員会文化財係長　　中井將胤  
　　　　　　文化財係　　宮田健一  
調査補助員　永田茂美　　椋木牧子　　麻野　遙  
調査参加者　佐伯昌俊　　下瀬恒男　　和崎　正　　大草彌榮子  
　　　　　　宅野美紀　　有福正之　　上田龍三　　豊田　伝  
　　　　　　藤高幸子　　松前純子　　栗栖美佐　　栗栖愛美  
　　　　　　高田憲一　　渡辺正美　　吉田健吾　　小野寺辰夫

3. 発掘調査に際しては、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、地元の方々にご協力を得るなど、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、土坑-SK、溝状遺構-S D、井戸-S E、石積・礎石遺構-S Xと略号している。なお、編集に利用した現地地図は、津和野土地改良区の協力を得た1/25000の縮尺のものであり、現地における基準点測量は、株式会社ワールドの協力を得て行った。

5. 調査に伴う記録類は、津和野町教育委員会で保管している。

6. 本書は永田・椋木・佐伯・麻野・中野氏の協力のもと、中井將胤が編集にあたった。

# 目 次

第1章 発掘調査の経緯と経過.....	1
第1節 発掘調査の経緯.....	1
第2節 発掘調査の経過.....	1
第2章 地区の概況.....	2
第1節 地理的環境と地形的立地.....	2
第2節 歴史的環境.....	3
第3章 調査概要.....	5
第1節 調査地点と調査区の設定.....	5
第2節 層序と層位.....	8
1. はじめに.....	8
2. 層序状況.....	8
1) 第1次調査.....	8
2) 第2次調査.....	10
第3節 遺構.....	13
1. はじめに.....	13
2. 検出遺構.....	13
1) 第1次調査.....	13
2) 第2次調査.....	16
第4節 遺物.....	18
1. はじめに.....	18
2. 第1次調査の出土遺物.....	18
3. 第2次調査の出土遺物.....	32
4. その他の遺物（津和野城下町遺跡から出土した「鍋島写し」）.....	41
5. 小結.....	42
第4章 まとめ.....	43

## 挿 図・表 目 次

第1図	位置図	1
第2図	地形断面図	2
第3図	位置と周辺の遺跡分布	4
第4図	調査地点位置図	5
第5図	元禄期の調査区周辺絵図	6
第6図	幕末期の調査区周辺絵図	6
第7図	第1次・2次調査区配置図	7
第8図	土層図（調査区I-1北壁）	8
第9図	土層図（調査区I-5北壁）	9
第10図	土層図（調査区I-13北壁）	9
第11図	土層図（調査区I-20北壁）	10
第12図	土層図（調査区I-27北壁）	10
第13図	土層図（C区 東壁）	10
第14図	土層図（調査区II-1北壁）	11
第15図	土層図（調査区II-2北壁）	11
第16図	土層図（調査区II-3北壁）	12
第17図	土層図（調査区II-9北壁）	12
第18図	土層図（調査区II-10北壁）	12
第19図	第1次調査 遺構配置図	13
第20図	S E 1 実測図	14
第21図	S E 2 実測図	15
第22図	S X 1 実測図	15
第23図	S X 2 実測図	16
第24図	調査区I-27 実測図	16
第25図	S D 1 実測図	17
第26図	第1次調査 出土遺物実測図①	18
第27図	第1次調査 出土遺物実測図②	19
第28図	第1次調査 出土遺物実測図③	20
第29図	第1次調査 出土遺物実測図④	21
第30図	第1次調査 出土遺物実測図⑤	22
第31図	第1次調査 出土遺物実測図⑥	23
第32図	第1次調査 出土遺物実測図⑦	24
第33図	第1次調査 出土遺物実測図⑧	25

第34図	第1次調査 出土遺物実測図⑨	26
第35図	第1次調査 出土遺物実測図⑩	27
第36図	第1次調査 出土遺物実測図⑪	28
第37図	第1次調査 出土遺物実測図⑫	32
第38図	試掘調査 出土遺物実測図	33
第39図	第2次調査 出土遺物実測図①	33
第40図	第2次調査 出土遺物実測図②	34
第41図	第2次調査 出土遺物実測図③	35
第42図	第2次調査 出土遺物実測図④	36
第43図	第2次調査 出土遺物実測図⑤	37
第44図	第2次調査 出土遺物実測図⑥	38
第45図	その他の出土遺物実測図	42

第1表	第1次調査 出土遺物観察表①	29
第2表	第1次調査 出土遺物観察表②	30
第3表	第1次調査 出土遺物観察表③	31
第4表	試掘調査 出土遺物観察表	39
第5表	第2次調査 出土遺物観察表①	39
第6表	第2次調査 出土遺物観察表②	40
第7表	その他の出土遺物観察表	42

## 図版目次

図版 1	1. 調査地点鳥瞰	45
図版 2	1. 第1次調査区近景（解体前）	46
	2. 第1次調査区近景（解体後）	46
図版 3	1. 第2次調査区近景（解体前）	47
	2. 第2次調査区近景（解体後）	47
図版 4	1. SE 1（検出状況）	48
	2. SE 1の内部	48
図版 5	1. 調査区I-5完掘状況	49
	2. 調査区I-11完掘状況（SE 2検出状況）	49
図版 6	1. 調査区I-13完掘状況（SX 1検出状況）	50
	2. 調査区I-16完掘状況	50
図版 7	1. 調査区I-17完掘状況（石列とレンガ敷検出状況）	51
	2. 調査区I-20完掘状況	51
図版 8	1. 調査区I-24完掘状況（SX 2検出状況）	52
	2. 調査区I-27完掘状況	52
図版 9	1. 試掘調査C区完掘状況（SX 4検出状況）	53
	2. 調査区II-1完掘状況（SX 3検出状況）	53
図版 10	1. 調査区II-2完掘状況	54
	2. 調査区II-3完掘状況	54
図版 11	1. 調査区II-4完掘状況	55
	2. 調査区II-5完掘状況	55
図版 12	1. 調査区II-6完掘状況	56
	2. 調査区II-7完掘状況	56
図版 13	1. 調査区II-8完掘状況（SD 1検出状況）	57
	2. 調査区II-9完掘状況（SD 1検出状況）	57
図版 14	1. 調査区II-10完掘状況（SX 3検出状況）	58
	2. 井戸検出地点	58
図版 15	出土遺物①	59
図版 16	出土遺物②	60
図版 17	出土遺物③	61
図版 18	出土遺物④	62

# 第1章 発掘調査の経緯と経過

## 第1節 発掘調査の経緯

平成20年7月7日、津和野町福祉事務所（保育園担当者）より津和野幼花園（私立保育園）改築工事地内の埋蔵文化財の有無、及び取扱いについての協議が津和野町教育委員会になされた。これに対し津和野町教育委員会は、今回の改築工事予定地は津和野城下町遺跡の中で重要な殿町に位置し、地表面より約70cm以下には当時の遺構等が現存する可能性が大きいため、建設場所の変更を協議したが既に変更計画は難しい状況にあり、昭和初期より保育園として営まれていた場所から移転するということは地域においても影響があると考え、工事はやむを得ないものと判断した。

平成20年8月20日、津和野町教育委員会は島根県文化財課の指導により、工事予定地内を工事着手前に発掘調査を行う必要がある旨を回答した。同年8月29日付で島根県教育委員会へ埋蔵文化財発掘調査通知を提出し、そして同年9月1日に依頼を受け、その後準備を進めて現地調査は同年10月2日より第1次調査を実施した。引き続き、平成21年8月18日より第2次調査を実施した。



第1図 位置図

## 第2節 発掘調査の経過

発掘調査を開始するにあたり、調査対象範囲を決めるため幼花園改築工事施工担当者と現地において工事範囲を確認し、園舎部分を第1次調査（津和野城下町遺跡4）、講堂部分を第2次調査（津和野城下町遺跡5）として発掘調査を開始した。平成20年度は1次調査から開始し、当時の現状は園庭と一部の園舎が残っており、園庭部分から調査を開始し、旧園舎部分については解体後に実施することにした。また、講堂部分については、旧園舎の解体後でなければ発掘調査ができないため、次年度（平成21年度）に実施した。

第1次の発掘調査が後半に差掛かった段階で、平成20年11月27日、県文化財課のは田氏が来跡され今後の調査方針の指導を現地で受けた。また、町文化財審議会会长の松島氏も来跡された。そして、第1次発掘調査は平成20年12月18日に無事終了した。

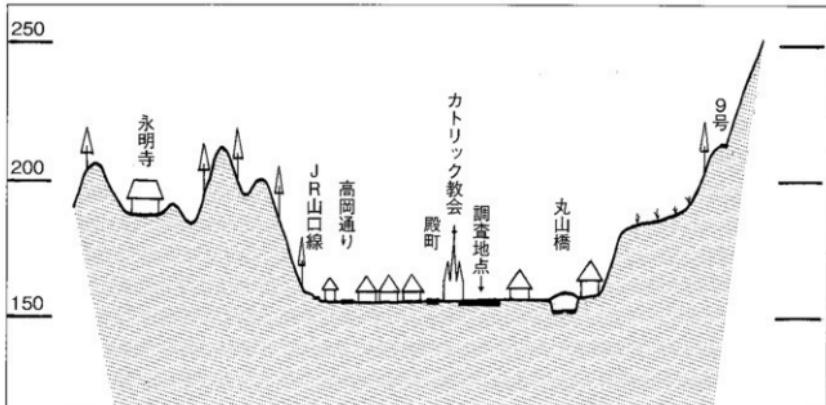
第2次調査は、平成21年9月11日から開始して、同年10月16日に現地調査を無事終了した。さらに、出土遺物の取扱い及び鑑定について、県文化財課の西尾氏・阿部氏や奥田元宋・小由女美術館館長の村上氏に指導を受けた。

## 第2章 地区の概況

### 第1節 地理的環境と地形的立地

本遺跡が所在する津和野町は、島根県西部に位置（第1図）し、北・東側が益田市、南側が吉賀町、西側が山口県に接した位置に存在する。そして、東西27km、南北19kmを測り、総面積高津307.09kmとなる。また、総面積の約8割以上が山林で、高津川や津和野川の流域とその支流が入り込み、流域に市街地、集落、農地が点在する、まさに典型的な中山間地域である。

津和野城下町遺跡は、島根県津和野町後田、鶯原、森村、中座地内に所在し、本町の南東部にあたる山口県との県境に位置する。城下町遺跡は西から北東方向に流下する津和野川が遺跡のほぼ中央を流れ、平均標高約170mを図る所に現存する（第2図）。そして城下町の形状は南北約3km、東西約3～500mを測る長方形を呈している。また、西側には津和野城（標高約350m）があり、城下町を取り囲むように400m級の山々、さらに900m級の山々がそびえて周囲を囲む形で盆地状の地形を形成している。そのため、津和野城や現在の国道9号線から津和野城下町が一望できる。



第2図 地形断面図

## 第2節 歴史的環境

津和野町には、これまでに多くの遺跡等が確認され発掘調査等を実施しており、今のところ後期旧石器時代にまで遡る。旧石器は町内で唯一ナイフ形石器が喜時雨遺跡から出土している。また、縄文時代以降の遺跡も数多く点在しており、開発等に伴いそれらの遺跡の一部は発掘調査等によって解明されつつある。

城下町遺跡周辺においても多くの遺跡が点在している。西側には標高350mの山頂に津和野城（石垣）が現存している。また、城下町の南西側に位置する津和野川付近からは、古い時代として、高田遺跡が確認され縄文時代早期の土器が出土している。その東側には、大蔭遺跡が確認されており縄文後期から奈良・平安時代の遺跡がある。さらに南側には、中世の山城である陶晴賢本陣跡があり、山の東側には長州藩へ続く主要街道である山陰道が良好な状態で現存している。

中世津和野の領主吉見氏は、弘安5（1282）年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の木部地区に入り、その後14世紀に津和野城を構えたと伝えられている。中世の津和野城の大手口は近世以降の大手口とは反対側の喜時雨にあったと伝えられ、吉見氏の居館や中世城下町も存在していた可能性が高い。しかし、16世紀末には城の東側に城下町の一部を整備していたと考えられた。

江戸時代になると、備前富山城主であった坂崎出羽守直盛が津和野3万石の城主として入城した。坂崎氏は、直ちに城の整備に取りかかり同時に城下町の整備をおこなった。大手を城の東側に移し南北3km、東西3～500mの細長い城下町が作られた。このような整備に当たった坂崎氏であったが「千姫事件」により、わずか16年の治世であった。

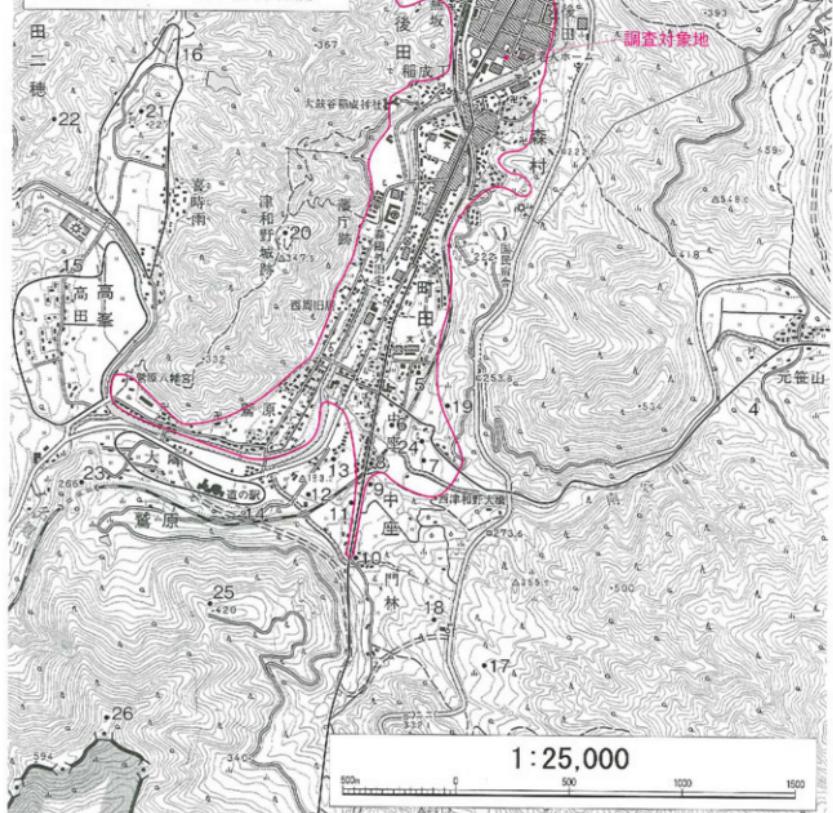
元和3年（1617）には因幡鹿野（現鳥取市）亀井政矩が4万3千石の城主として入城した。藩邸は当初現在の役場がある殿町に在ったが火災により焼失したため現在の津和野高校へ移転している。防衛上の堀には津和野川を利用していたが、さらに人工の外堀も寛永15年（1638）に整備され、この時点で城下町はほぼ完成されたと考えられた。

本調査区周辺は、藩邸は移転したもの上級武家屋敷が並ぶ地区であった。しかし、嘉永の大火により城下町のほとんどが焼失し殿町も例外ではなかった。大火の後は、森村にあつた藩校養老館を調査区周辺に移転し、その後明治を迎えることになる。明治以降は南西側にあった藩校の校舎のみが残る形となったが、運動場の部分については女学校や酒屋、カトリック協会などが建てられた。



殿町（津和野百景より）

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1. 津和野城下町 | 14. 大藤遺跡   |
| 2. 山陰道    | 15. 高田遺跡   |
| 3. 奥筋往還   | 16. 喜時雨遺跡  |
| 4. 廿日市街道  | 17. 仿僧原遺跡  |
| 5. 石田遺跡   | 18. 上ノ山の水室 |
| 6. 高崎龜井家跡 | 19. 狐尾遺跡   |
| 7. 觀音平遺跡  | 20. 津和野城跡  |
| 8. 東中組遺跡  | 21. 喜時雨陣跡  |
| 9. 元山遺跡   | 22. 御陣場山城跡 |
| 10. 門林遺跡  | 23. 茶臼山城跡  |
| 11. 山崎遺跡  | 24. 丸山城跡   |
| 12. 桂川遺跡  | 25. 陶晴賢本陣跡 |
| 13. 西中組遺跡 | 26. 段原山城跡  |



第3図 位置と周辺の遺跡分布

# 第3章 調査概要

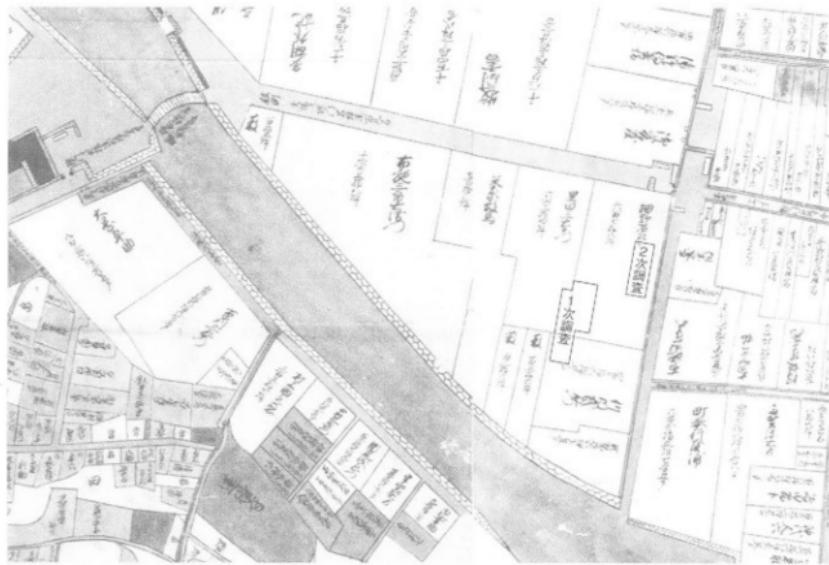
## 第1節 調査地点と調査区の設定

### 1. 調査地点

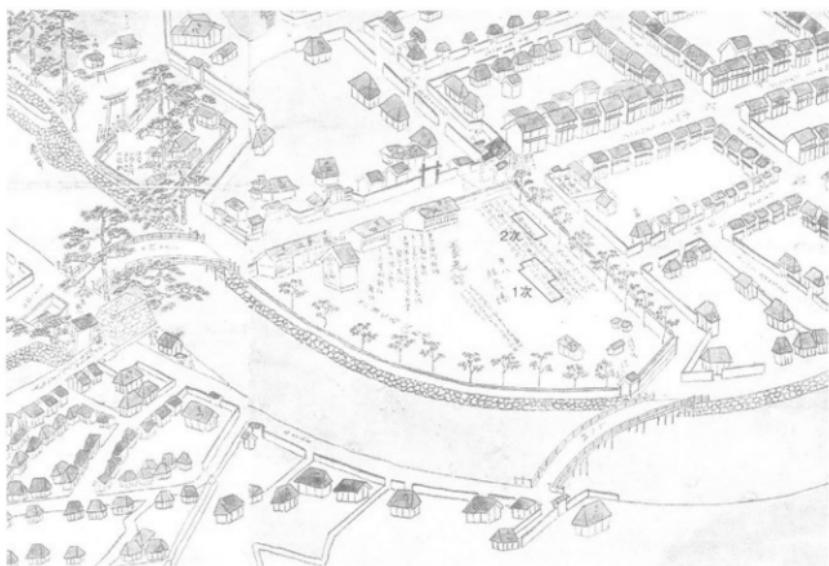
今回の幼花園改築工事予定地は、津和野城下町遺跡の北東付近に位置しており標高約155mを測り、現在も殿町と呼ばれている地区である（第4図）。現存する一番古い屋敷絵図（元禄期）から判断すると細野・里田家といった上級武家屋敷の敷地であると考えられた（第5図）。また、幕末期においては藩校養老館の敷地内で建物等は無かった場所であると想定される（第6図）。明治期に入ると堀潤屋として利用されるが、昭和初期からキリスト教会の教会などが建設され、ほぼ同時に保育園が運営されて今まで至っている。



第4図 調査地点位置図



第5図 元禄期の調査区周辺絵図



第6図 幕末期の調査区周辺絵図

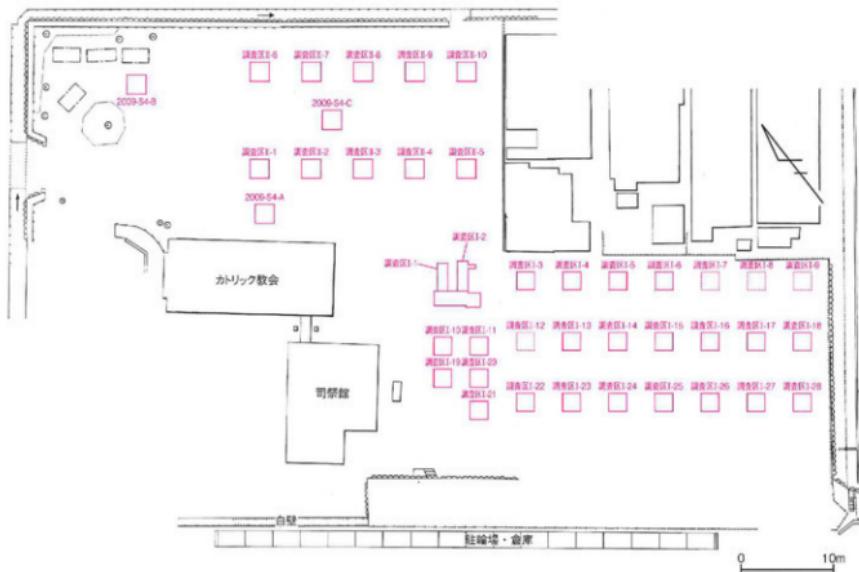
## 2. 調査区の設定

幼花園改築工事予定地は全体で約600m<sup>2</sup>を測る。まず最初に調査方法として全面発掘調査をするか、工事等で破壊される所のみを発掘調査するのかについて島根県文化財課と協議をした。その結果、なるべく破壊されない部分は現状保存という方針をとり、基礎部分で遺跡が破壊される部分のみ発掘調査することにした。

そして、一つの基礎が約2 m × 2 m四方で深さ1.5mであることから、同型の調査区を設定し、第1次調査は合計28ヶ所の発掘調査を実施した。なお、調査終盤において一部確認調査をするために1 m × 3 mのトレンチを2ヶ所設けた。その結果トレンチ部分を含めて合計約118m<sup>2</sup>を測る部分を調査した。また、第2次調査は合計10ヶ所を設定し、40m<sup>2</sup>を測る部分を発掘調査した。

本調査はトレンチ状に多くの箇所を調査したため、調査区の混乱を避けるために第1次調査区をI-1からI-28とし、第2次調査区をII-1からII-10までの番号によって区別することにした(第7、8図)。

なお、調査区I-7、8、9、12については、浄化槽が設置されていた場所のため、重機での掘削作業を立会することにした。



第7図 第1・2次調査区配置図

## 第2節 層序と層位

### 1. はじめに

本節で記している土層の色彩は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人 日本色彩研究所が監修している、小山正忠・竹原秀雄 著『新版 標準土色帖 2004年版』を使用している。

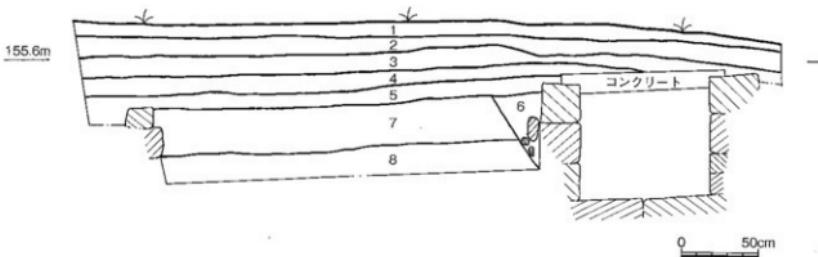
### 2. 層序状況

本遺跡の基本層序としては、第1、2次調査ともに調査方法が試掘トレンチ状に発掘した形になっているため、全体として把握することが困難であったことを冒頭で説明した上で、以下のように層序について検証したので第1次から順に述べておく。

#### 1) 第1次調査

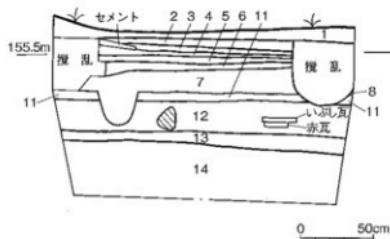
第1次調査では、記録保存として全ての調査区ごとに土層は実測しているが、ここでは東西南北で比較的搅乱が少ない調査区1・5・13・20・27の土層についてのみ記述することにする。

まず調査区I-1は、調査地点の北西端に位置する調査区で南側には井戸1号に繋がる。1層の表土はマサ土で保育園の運動場のために敷いた土である。2、3層は旧表土である。4層は灰黄褐色土(10YR4/2)で砂が混じる。5層は黒褐色土(10YR3/2)、6層は褐色土(10YR4/4)で南側にある井戸遺構を造る時に埋められた土であり小石を多く含む層である。7層は褐色土(10YR4/4)拳ぐらいの石が多く、北側には石垣と考えられた石列も検出された。8層は褐色土(10YR4/4)で石を含まない(第8図・図版4)。

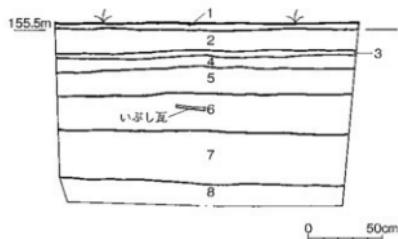


第8図 土層図（調査区I-1北壁）

調査区 I - 5 は、1 層の表土、2 層の石炭ガラ、3 層の褐灰色土、4 層の石炭ガラ、5 層の黄褐色土 (10YR5/6) であり、これらは昭和時代以降に盛土された層である。6 層も褐灰色土 (10YR4/1)、7 層の褐色土 (10YR4/4) である。次の 8、9、は北壁では確認できなかったが、2、3 層と同様に石炭ガラと明褐色粘質土であり昭和期において人工的に盛土した部分である。10、11 層も同様である。12 層は褐色土 (10YR4/4) で瓦や陶磁器を多く含んだ。遺物包含層である。13 層は黒褐色土 (10YR3/2)、14 層は暗褐色土で本層でも瓦や陶磁器が大量に出土した (第 9 図・図版 5)。



第9図 土層図(調査区 I - 5 北壁)



第10図 土層図(調査区 I - 13 北壁)

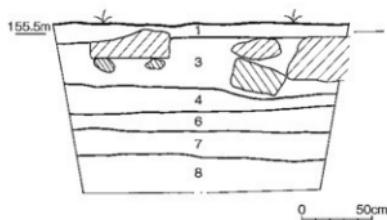
調査区 I - 13 では、1 層は表土 (マサ土)、2 層は旧表土、3 層は石炭ガラ層、4 層は黒褐色土 (10YR3/1)、5 層は灰黄褐色土 (10YR4/2) で少し粘質土、6 層にはぶい黄褐色土 (10YR5/4)、7 層にはぶい黄褐色土 (10YR4/3)、8 層は黄褐色土 (10YR5/6) で砂礫層であった。地表面から約 50cm 下の 6 層から江戸期の瓦が出土している。おそらく 6 層から上面においては明治以降に盛土されたと考えられた (第10図・図版 6)。

調査区 I - 20 では、1 層の表土、2 層の明黄褐色土 (10YR6/6) 3 層の暗褐色土 (7.5YR4/6) で、比較的大きな石を含む層であり礎石的なものも含まれていたと考えられた。4 層は灰黄褐色土 (10YR4/2)、5 層の黄褐色砂土 (10YR5/6)、6 層の暗褐色土 (10YR3/3) で炭を多く含む。7 層の暗褐色土 (10YR3/3) で小石を多く含む砂質土、8 層の黄褐色土 (砂利層) である (第11図・図版 7)。

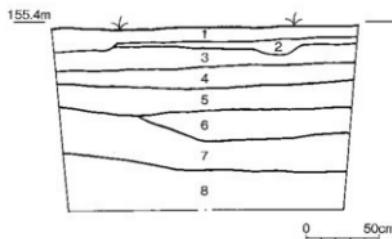
調査区 I - 27 では、1 層の表土、2 層の石炭ガラであった。3 層は暗褐色土 (10YR3/3) 4 層黒褐色土 (10YR3/2)、5 層黄褐色土 (10YR5/6) 5 ~ 10cm 大の石を多く含む、6 層灰黄褐色土 (10YR4/2) 10cm 前後の石を多く含む、7 層暗褐色土、8 層にはぶい黄褐色土 (10YR3/4) 20cm 大の石を多く含む砂利層である (第12図・図版 8)。

以上のように第1次調査区における比較的の搅乱が少なかった調査区の層序を見た。盛土が約 50cm であったことから明治以降において開発等が行われた結果、江戸時代の遺構面まで影響を及ぼしており調査区全体において残念ながら遺跡が破壊されてきた部分多い状態であった。しかし、中世末期か

ら江戸時代の初期にかけては比較的良好にのこされていた。しかし、江戸時代において火事が何回か記録されているが、本調査地点からは焼土層を確認することはできなかった。



第11図 土層図（調査区I-20北壁）



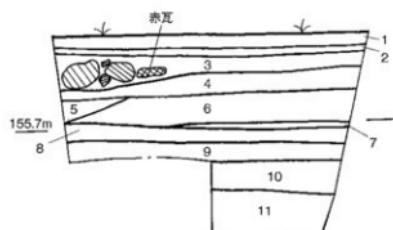
第12図 土層図（調査区I-27北壁）

## 2) 第2次調査

第2次調査においても、記録保存を目的としているため全ての調査区において土層を記録している。しかし、ここでは搅乱による破壊区域が少なかった1区、2区、3区、9区、10区と試掘調査で発掘したC区の土層を中心に、この区域での層序について検証することにする。なお、第2次調査においては試掘において地上面から約60cm下まで明治以降の盛土であることを確認していた。そのため上層部は重機により掘削した。試掘調査したC区の層序はすべて記録をとっているが、それ以外の調査区においては、地上より60cm以下の層序について検証する。

試掘調査したC区では、1層は表土、2層はセメント、3層は暗褐色土(10YR3/3)、4層は褐色土(10YR4/4)、5層は暗赤褐色土(5YR3/2)で焼土層であった、6層は褐色土(10YR4/4)、7層は暗赤褐色土(5YR3/3)で焼土層である、8層は暗褐色土(10YR3/3)、9層は黒褐色土(5YR2/2)、10層は暗褐色土(10YR3/3)、11層は暗褐色土(10YR3/4)である。5、7層で焼土が確認された。おそらく、5層の焼土層は昭和6年の堀酒屋時代の火事跡であると思われ、7層は城下町全体が焼けたと言われる嘉永の大火灾である可能性が高いと判断した。また、7層直下において礎石と思われるものも検出され、8、9層付近が嘉永時代の生活

面であると思われた（第13図・図版9）。

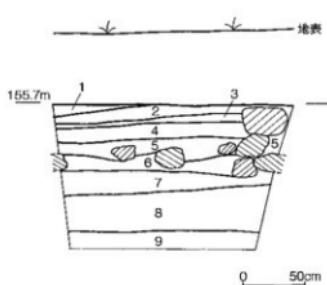


第13図 土層図（C区 東壁）

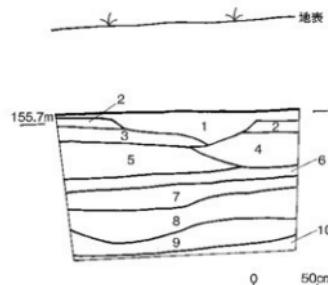
調査区II-1では、1層は暗灰黄色土(2.5YR4/2)、2層は暗灰黄色土(2.5YR4/2)で焼土層であった。3層は明黄褐色土(10YR6/6)、4層は灰黄褐色土(10YR5/2)、5層はにぶい黄橙色土(10YR6/3)、6層はにぶい黄橙色土(10YR6/3)で20cm大の石を多く含む。7層は灰黄褐色土(10YR4/2)で焼土を含む。8層は黒褐色土(10YR3/2)で拳大の石を多く含む。9層はにぶい黄橙褐色の砂質土であつた。8層より上層は出土包含層で9層からは殆ど出土遺物は確認されていない(第14図・図版9)。

調査区II-2では、1層は暗褐色土(10YR3/3)、2層は暗褐色土(10YR3/3)で焼土層であった。3層はにぶい黄橙色土(10YR6/4)で砂利を多く含む。4層は灰黄褐色土(10YR4/2)、5層はにぶい黄褐色土(10YR5/3)、6層はにぶい黄褐色土(10YR7/4)、7層は灰黄褐色土(10YR5/2)で炭を少量含む。8層は灰黄褐色土(10YR4/2)、9層は灰黄褐色土(10YR5/2)、10層はにぶい黄橙砂質土(10YR6/4)であった(第15図・図版10)。

調査区II-3では、1層は2層は暗赤褐色土(2.5YR3/3)で炭が混ざる。3層は極暗赤褐色土(2.5YR2/2)で焼土層である。4層は黒褐色土(7.5YR3/1)、5層は暗褐色土(7.5YR3/3)で炭が混ざる。6層は明褐色土(7.5YR5/6)、7層は暗褐色土(7.5YR3/3)、8層は黒褐色土(7.5YR3/2)、9層は褐色土(7.5YR4/1)で砂利層、10層は褐色砂質土(7.5YR4/3)であった(第16図・図版10)。

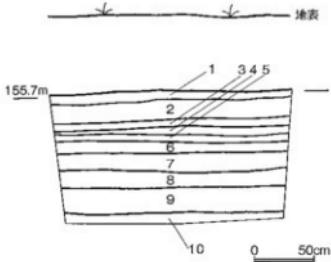


第14図 土層図(調査区II-1北壁)

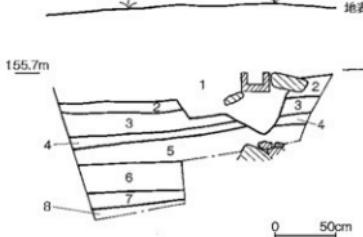


第15図 土層図(調査区II-2北壁)

調査区II-9では、1層は褐色灰色土(10YR4/1)で水路を構築する際に掘削した層である。2層は極暗褐色土(7.5YR2/3)で焼土層である。3層は暗褐色土(7.5YR3/4)で炭が混じる。4層は暗赤褐色土(5YR3/6)で焼土層である。5層はにぶい黄褐色土(10YR4/3)、6層は暗褐色土(10YR3/3)、7層は黒褐色土(10YR2/2)で炭が混じる。8層は暗褐色砂質土(10YR3/3)(第17図・図版13)。

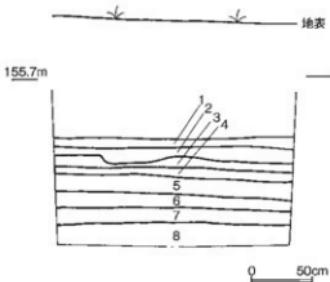


第16図 土層図（調査区II-3北壁）



第17図 土層図（調査区II-9北壁）

調査区II-10では、1層は暗赤褐色土(5YR3/4)で炭が混じる。2層は黒褐色土(5YR2/2)で焼土層である。3層は暗褐色土(7.5YR3/3)、4層は明褐色土(7.5YR5/6)、5層は暗褐色土(7.5YR3/4)で炭が混じる。6層は暗褐色土(7.5YR3/3)で砂利層、7層は黒褐色土(7.5YR3/2)、8層は褐色砂質土(7.5YR4/3)である（第18図・図版14）。



第18図 土層図（調査区II-10北壁）

以上のように、第2次調査区において搅乱が比較的少ない箇所において層序考察した。

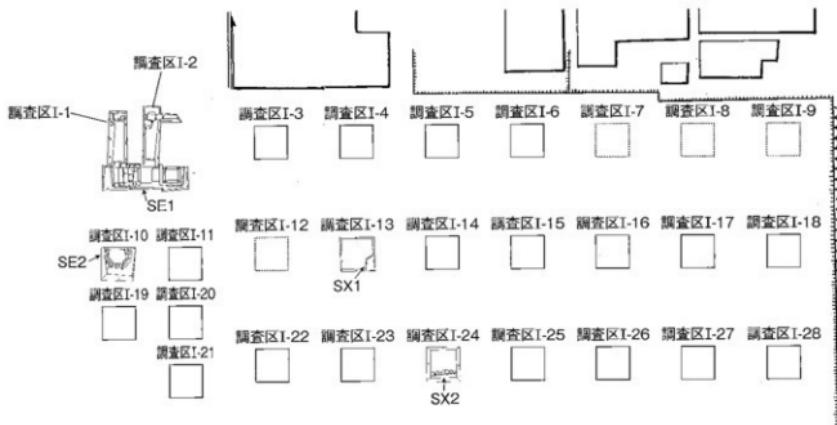
全体的に言えることは、まず焼土層が2層確認できることである。重機掘削した部分においても1層焼土面を確認できたが、これは昭和6年の火事であると思われた。その下層で確認された焼土層は江戸時代のものであると考えられ、遺物との総合的な判断から上層の焼土は嘉永の大火である可能性が高い。下層については、であるのではないかと思われた。

第1、2次調査を総合的に見てみると、今回調査した最下層付近は中世期の遺物が出土しており、江戸時代以前から人々が住んでいたことは確かであった。また、近世城下町が作られる以前のことを考える上で貴重な資料である。さらに、その下層からは殆ど遺物が確認されておらず、中世以前は津和野川であったという記録を立証する結果となった。また、第2次調査区では焼土層が確認できたが第1次調査では確認できなかった。このことは、上級武家屋敷内であったため、建物が有る部分と無い部分による結果であると思われた。

## 第3節 遺構

### 1. はじめに

今回の調査は第1次調査、2次調査ともに全面発掘調査ではなかったので、全体を面として捉えることが出来なかつたため、遺構等を検出することが困難であった。そのような中で確認できた土構1基（SK）、井戸2基（SE）、水路1条（SD）、石積・礎石など（SX）、の遺構について第1次調査、第2次調査ごとに本節では述べることとする。（第19図）。



第19図 第1次調査 遺構配置図

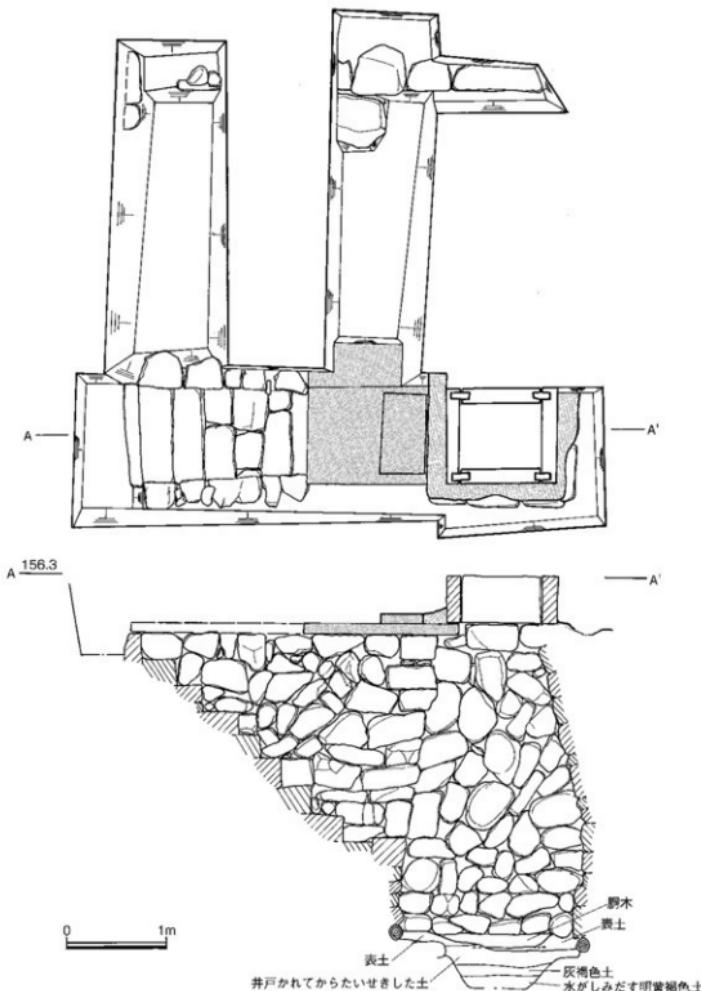
### 2. 検出遺構

#### 1) 第1次調査

SK1と称した遺構は、調査区I-14で検出されたものである。人工的に地面に穴を掘っているのは確認できたが、その形状や大きさについては発掘面積に制限があったためその全貌は明らかに出来なかつた。また、遺物は集中的に出土して瓦・陶磁器・土師質土器・炭化物が検出された。用途については確かなことは言えないがゴミ捨て場的なものではないかと考えた。また、年代的なことは出土遺物から19c初頃ではないかと思われた。

SE1は（第20図、図版4）、発掘調査によって検出されたものではなく、古い建物を解体した時に確認されたもので、表面に露出した状態であった。しかし、部分的には埋もれていた場所もあったため、トレーナー1、2を設定して調査した、発掘調査等の結果により明治期以降の井戸であると考えられた。井戸の形状は1m×1mの方形で深さ約3mを測り、水を汲むために階段で降りられるよう

な構造になっている。階段は西側から降りる構造で幅約1m、段差が20cm、そして8段の階段が設けられていた。この場所は明治期から昭和の初期にかけては酒屋であったため、その酒造に必要な井戸であると判断した。また、近隣の古くからある酒屋にもこのような同様の井戸が確認されている。



第20図 S E 1 実測図

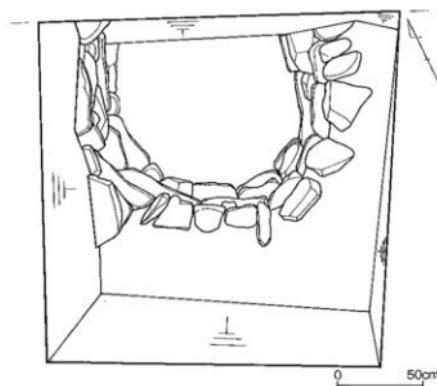
S E 2は、調査区11で検出されたものである。直径180cmの円形で40～50cmくらいの石を積み上げている。深さについては発掘範囲等の制限があつたために確認することは出来なかつた。出土遺物や土の堆積状況から判断して、おそらく江戸期に使用されていたもので、明治期以降は使用されていなかつたと思われた。(第21図、図版5)

S X 1は、調査区I-13から検出された比較的大きな石である。上面が平になるように設置されていることから人工的に据えたものであると判断した。しかし、建物の礎石なのか庭の一部として利用されたものなのか調査範囲が狭いためその用途については分からなかつた(第22図、図版6)。

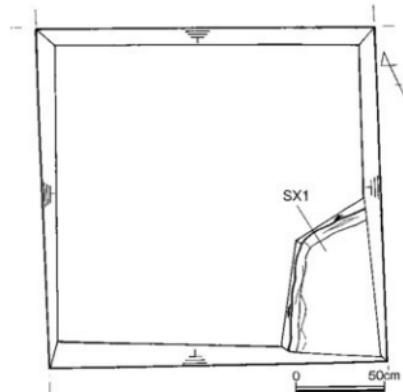
S X 2は、調査区I-24から検出された石組み遺構である。石の大きさは平均して30cmくらいであり大きな石を積んでいない。方向としては東西に並べていると考えられ、調査区外に続いているため全貌を明らかに出来なかつた。屋敷などの建物に関係するのか、屋敷境に関係するのかの判断はできなかつた(第23図、図版8)。

調査区I-17からは、レンガを敷いた遺構が検出された。調査区の範囲が限られていることから全貌を明らかにすることは出来なかつた。

この遺構も出土遺物等から明治期以降に作られたものであると判断した。また、同じ調査区内に90cmを測る大きな石が並んでいる。この石列は講の調査区と、繋がるのではないかと想定した。確かにことは言えないが、おそらく石列が続いており、その一部分ではないかと思われた(第24図、図版7)。



第21図 S E 2 実測図



第22図 S X 1 実測図

以上、第1次調査において確認できた遺構について述べたが、調査区が一ヶ所4m<sup>2</sup>と限られた狭い範囲の調査であり、また擾乱を受けている部分が多いので他の遺構は確認することができなかった。また、井戸以外の遺構については不確定な部分が多い結果となつた。

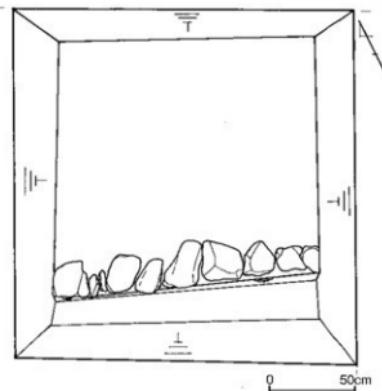
## 2) 第2次調査

調査区II-6は、他の調査区とは少し様相が異なっていた。地表面から約1.5mの深さを掘削したが、ほぼ全体が一つの層になつてゐると思われた。出土遺物もほぼ同一時期の物であった。確かにことは言えないが、おそらく大きな池のようなものがあつて、後世に埋められたのではないかと考えられた。

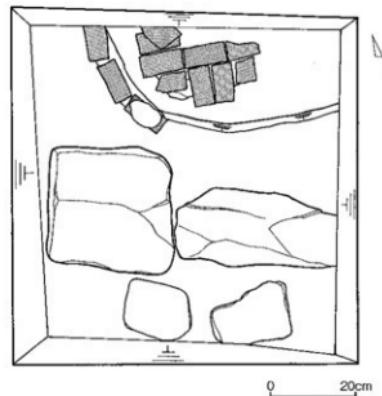
S D 1は、調査区II-8、9から検出された排水路遺構である。幅は内径15cm、外形25cmで、深さ9cm、そして長さが88cmを測る一つの石を加工したもののが一つのパーツとし、それを組み合わせて排水路を構築していた。また、ところどころの水路両側には石または平瓦が縦に埋められていたが、その理由については分からなかつた。

また、この遺構については、検出層や出土遺物から判断して明治以降に築かれた水路であると考えられた。そして、明治以降から現在まで続く酒屋の水路もほぼ同様の水路があるため、おそらく堀酒屋当時の水路であることに相違ないと判断した(第25図、図版13)。

S X 3は、調査区10から検出された、直径40cmを測る表面が平らな石である。一方は上面が平で建物礎石である可能性はあるが、もう一つの石については判断がつかなかつた。層的には石の直上が焼土層(嘉永大火)であることから嘉永期にあたる(図版14)。

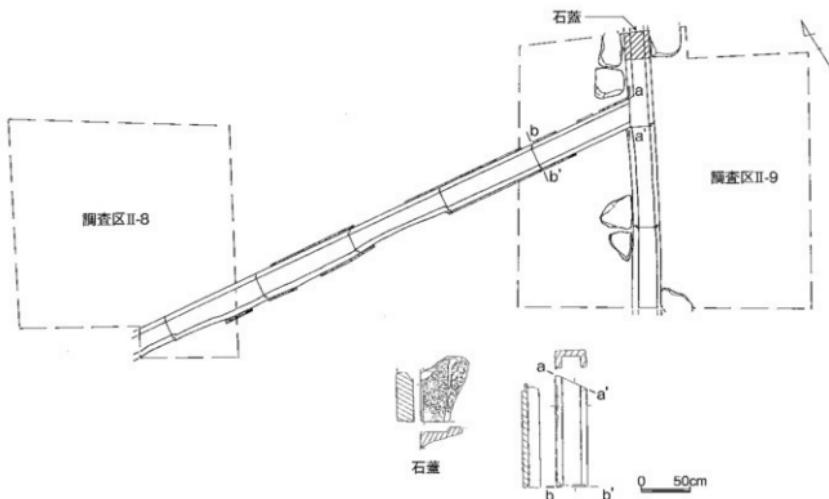


第23図 S X 2 実測図



第24図 調査区 I - 17 実測図

S X 4 は、試掘調査の C 区で検出された、直徑 40cm の上面が平らな石である。おそらく建物の礎石ではないかと思われた。遺物や土層から判断した結果、嘉永期までの建物の礎石ではないかと判断した。また、S X 3 と検出状況が同様であることから同一の建物である可能性は考えられたが、調査区が狭いため詳しいことは分からなかった（図版 9）。



第25図 S D 1 実測図

以上、第2次調査における確認できた遺構について述べたが、調査区が一ヶ所 4 m<sup>2</sup>と限られた狭い範囲の調査であり、また搅乱を受けている部分があるため、遺構として判断できるものが少ない結果となった。第1次調査でも同様に言えることではあるが、調査区が離れているため遺構を検出することができても、その全貌を明らかにすることも難しい結果となった。

また、建物（旧幼花園舎）を解体した部分から井戸が確認された。おそらく明治以降、堀酒屋時代のものであると判断した（図版14）。

## 第4節 遺物

### 1. はじめに

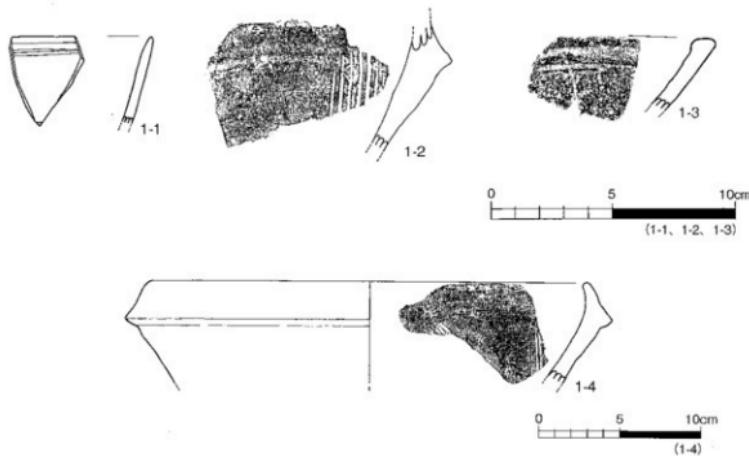
今回の調査は、2m×2m四方の調査区を第1次調査では28ヶ所、第2次調査では10ヶ所設定して発掘を行ったため、第1次、2次調査に分けて検討した。また、出土遺物が大量であったため、遺跡の特徴を表すのに適しているものを選出して実測図と写真を掲載することとした。さらに、詳細については遺物観察表にまとめた。

### 2. 第1次調査の出土遺物

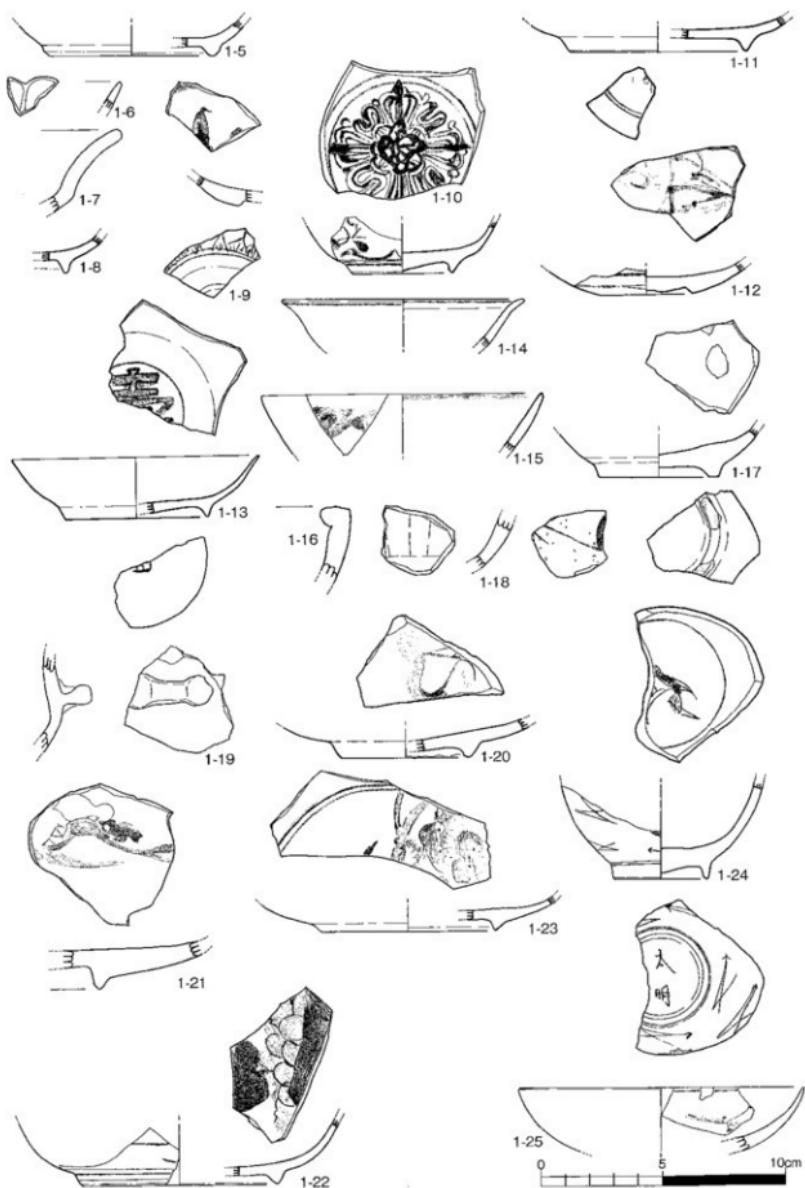
第1次調査からは、陶磁器類がパンコンテナー10箱、瓦類18箱からなる遺物が出土している。その内訳は、近世以降の陶磁器をはじめ、土師質の灯明皿、瓦類（燐瓦・赤瓦）などがほとんどであり、下層から僅かであるが中世時代の陶磁器や土師器類が出土している。

陶器は、18世紀から19世紀代の江戸後期から近代に至るまでの製品が大半を占める。器種には、碗・碗蓋・皿・鉢・擂り鉢・壺・急須・徳利・盃・紅皿・火鉢・灯明皿などであった。その多くは肥前の製品であったが、京焼の碗や須佐唐津のすり鉢などの陶器類も確認された。参考までに出土物（陶磁器類）の割合を集計すると、凡そ肥前系磁器39%、陶器類46%、地元産13%、青磁・白磁2%であった。

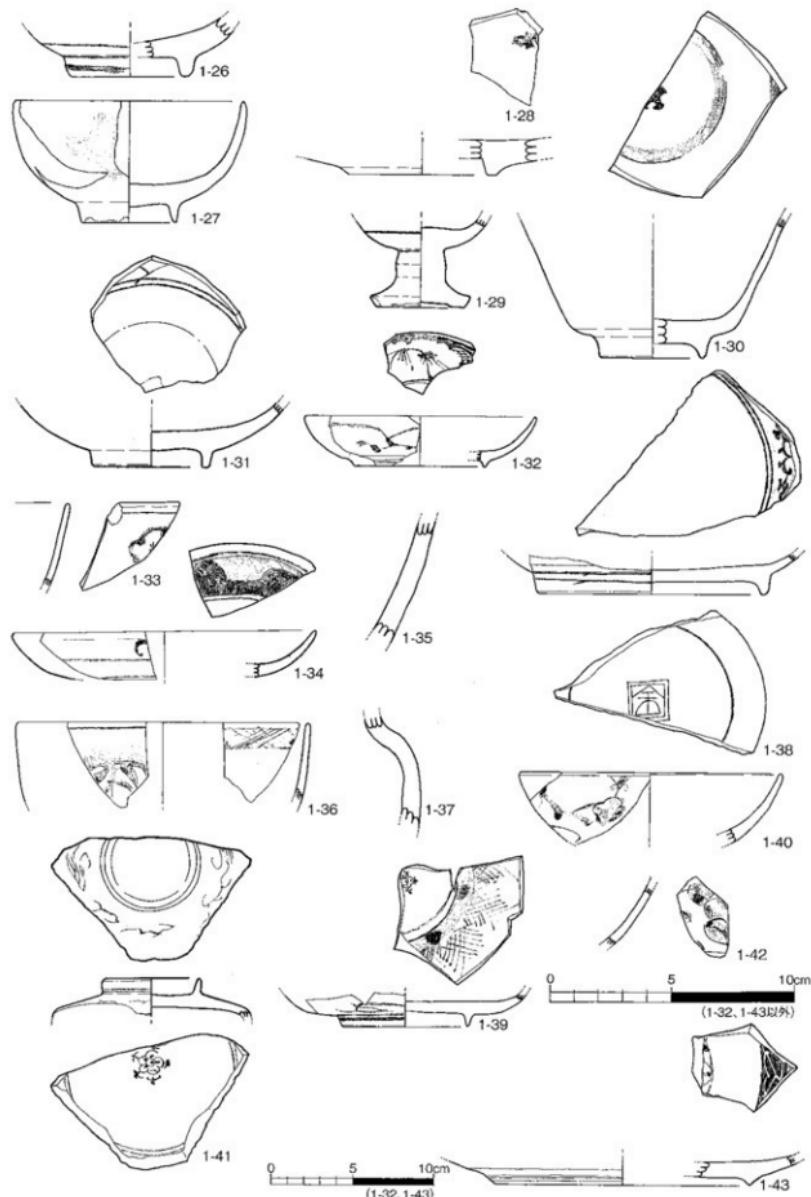
本報告書では、これらの出土遺物から218点を選び、実測図・写真を掲載し、その内容は遺物観察表をもって説明に代えたい。



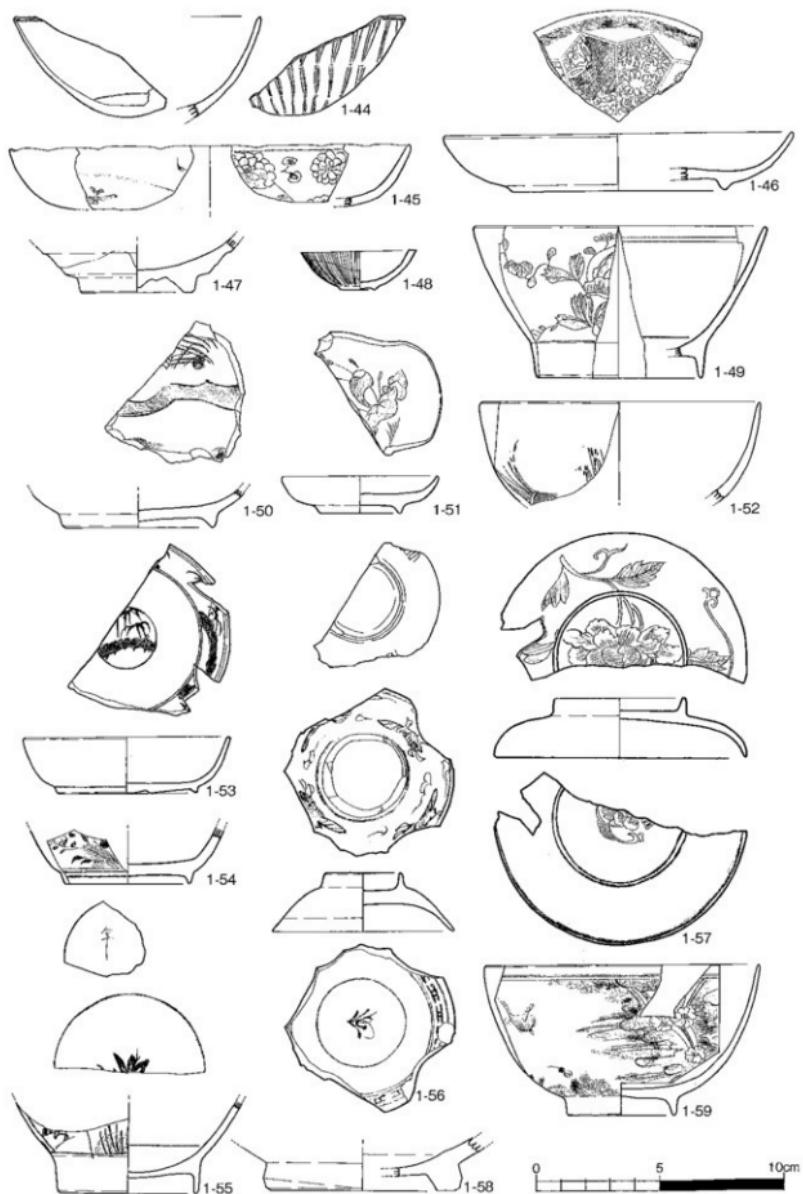
第26図 第1次調査 出土遺物①



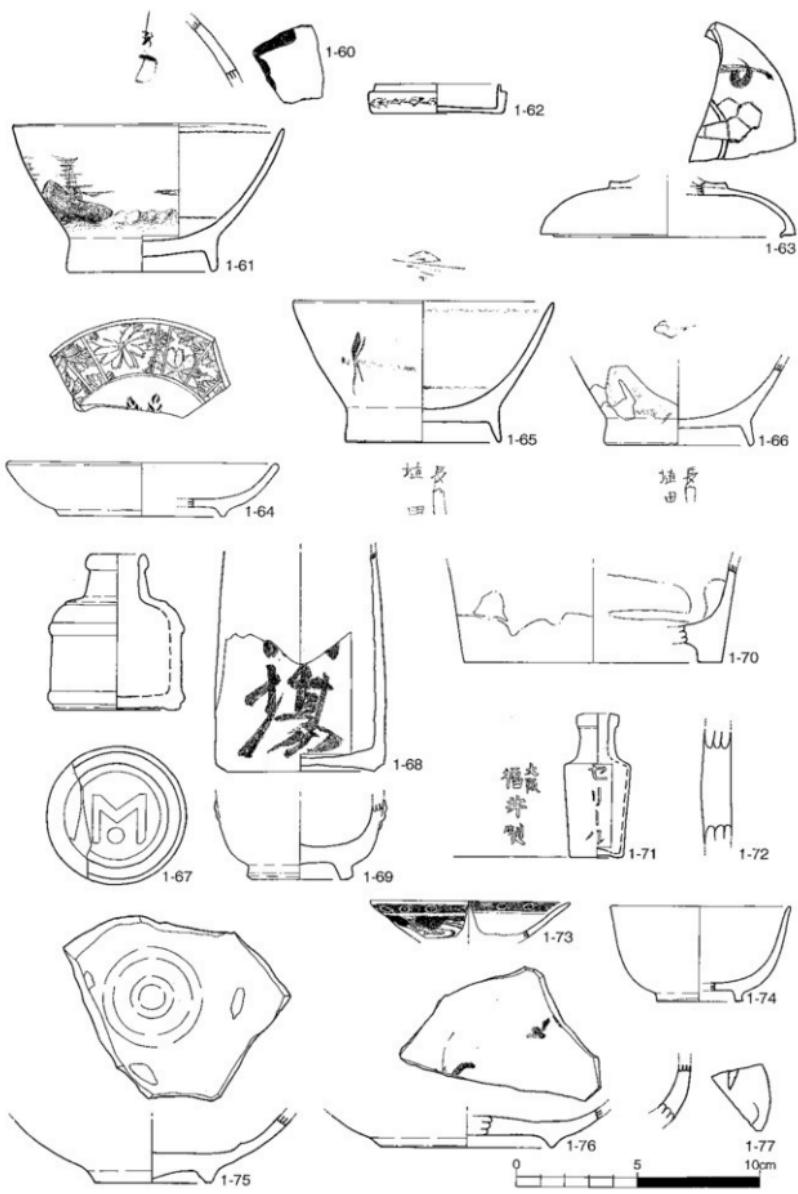
第27図 第1次調査 出土遺物②



第28図 第1次調査 出土遺物③



第29図 第1次調査 出土遺物④



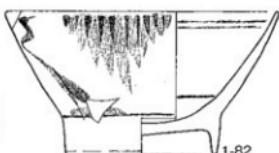
第30図 第1次調査 出土遺物⑤



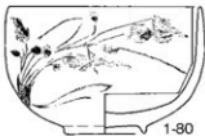
1-78



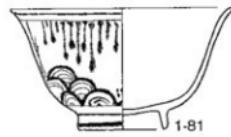
1-79



1-82



1-80



1-81

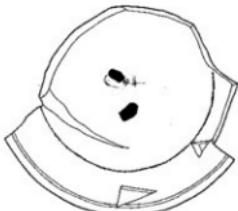


1-83

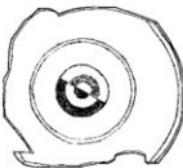


1-84

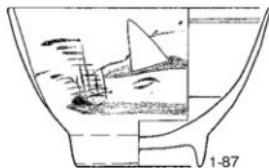
1-85



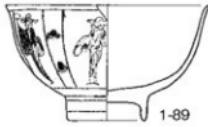
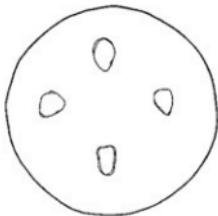
1-86



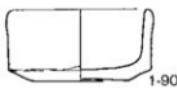
1-87



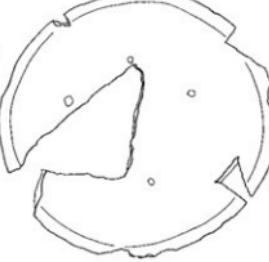
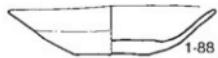
1-87



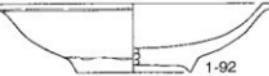
1-89



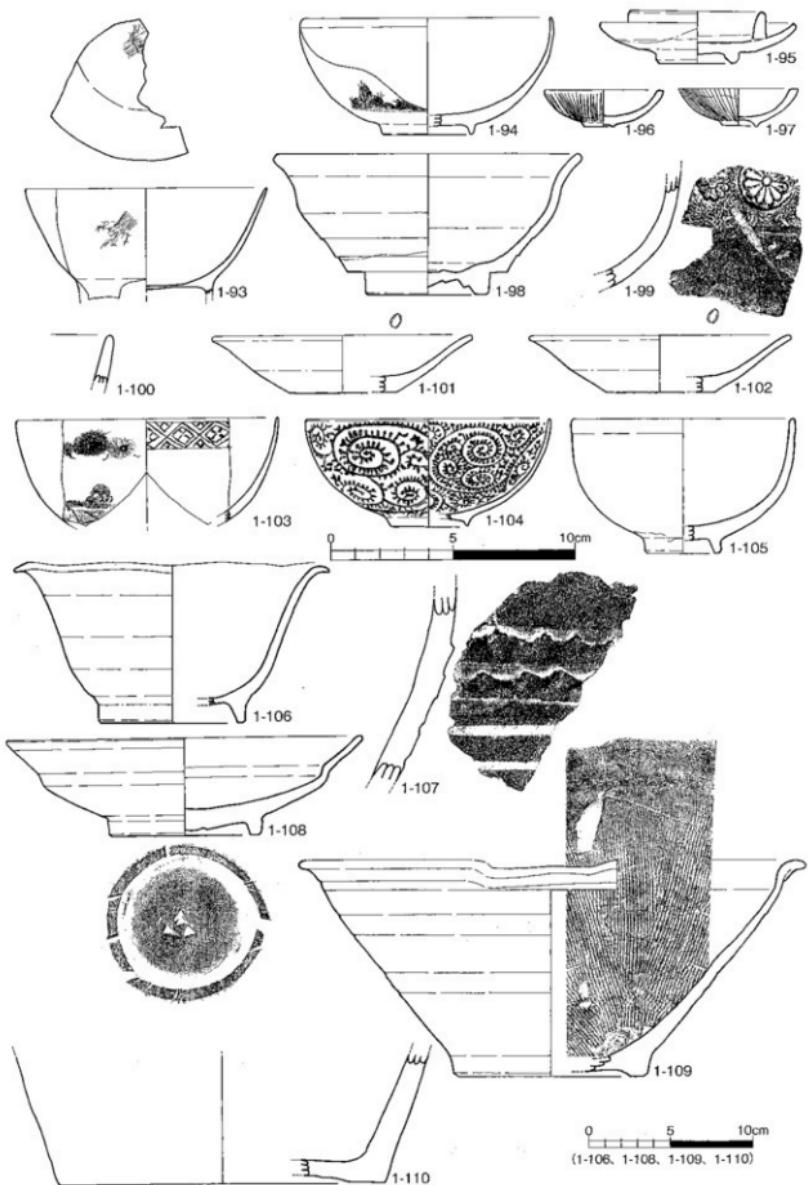
1-90



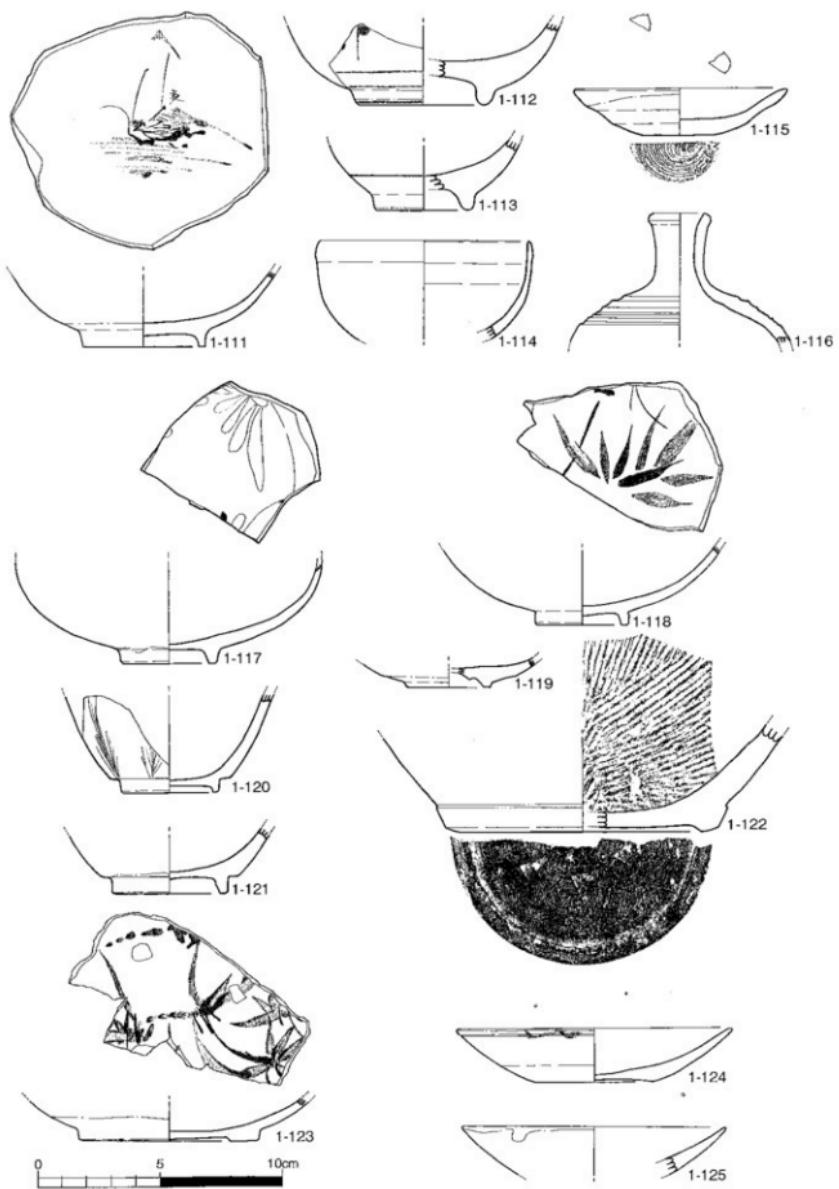
1-91

10cm  
(1-89, 1-92以外)0 5 10cm  
(1-89, 1-92)

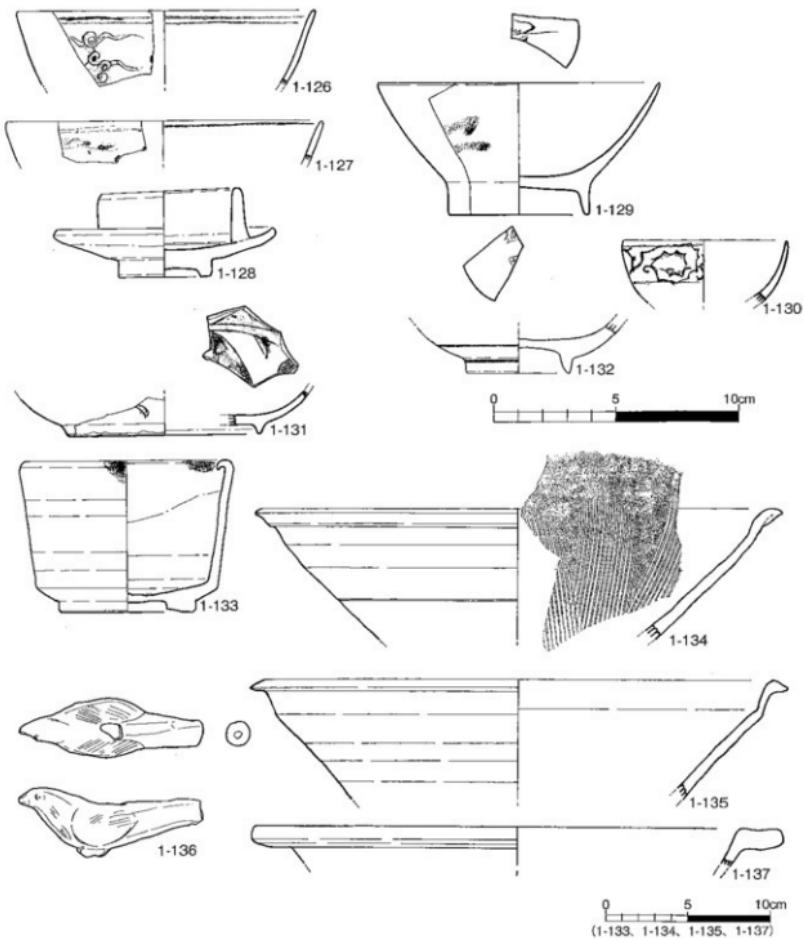
第31図 第1次調査 出土遺物⑥



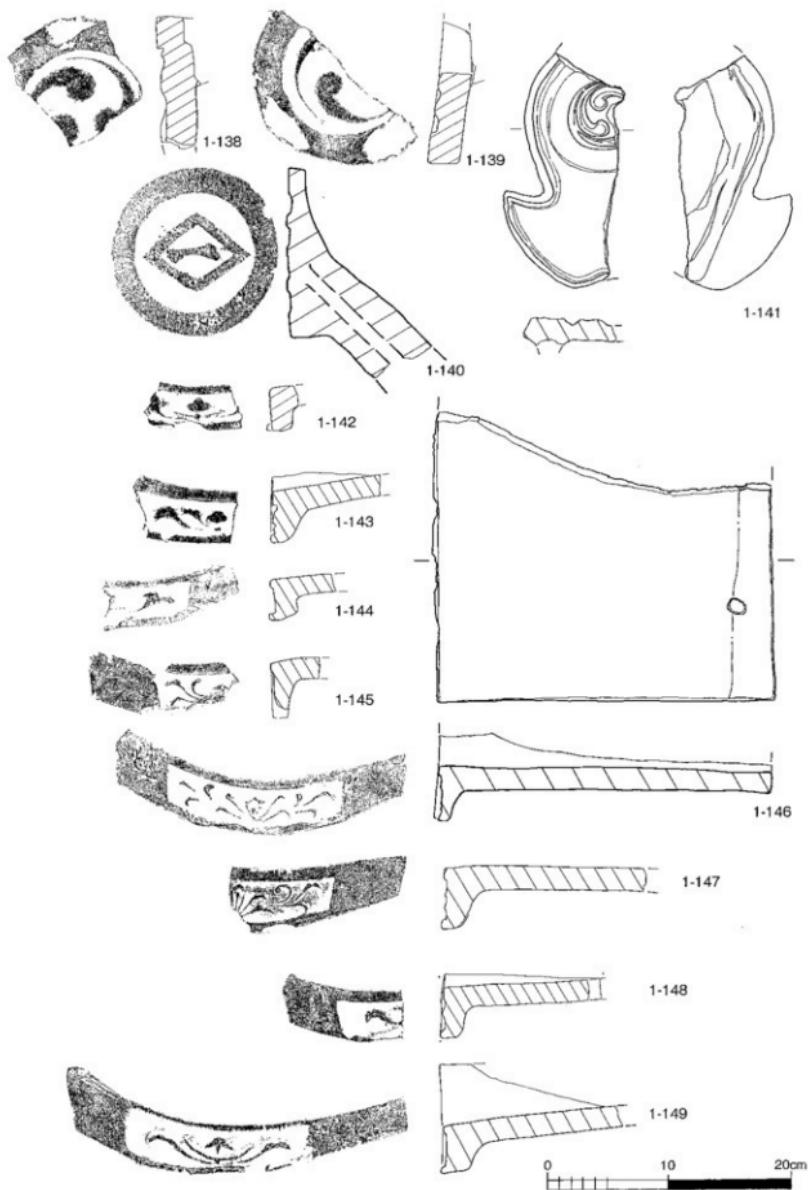
第32図 第1次調査 出土遺物⑦



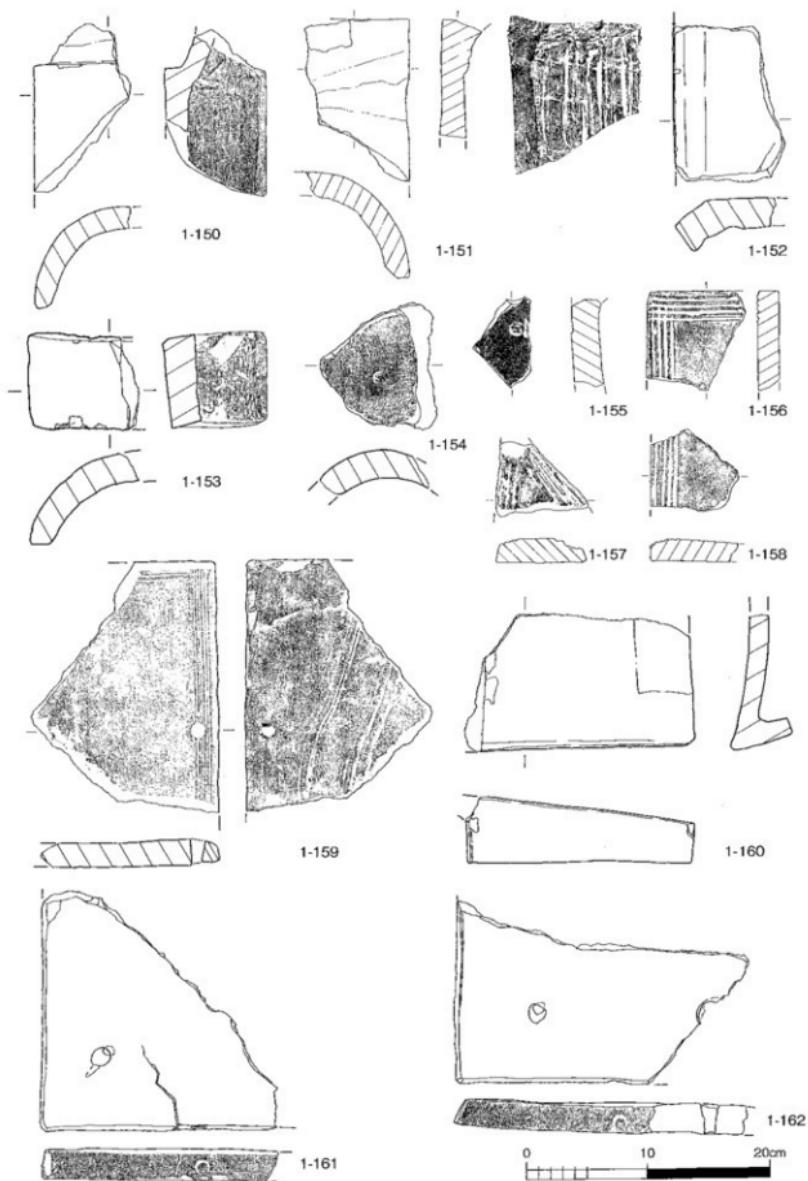
第33図 第1次調査 出土遺物⑧



第34図 第1次調査 出土遺物⑨



第35図 第1次調査 出土遺物⑩



第36図 第1次調査 出土遺物①

第1表 第1次調査 出土遺物観察表①

遺物番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm) 口径 底径 器高			年代	产地	文様等
					口径	底径	器高			
1-1	28	9~12層	磁器	碗	—	—	—	13c	中国	青磁
1-2	4	17~19層	陶器	擂鉢	—	—	—	中世	唐前	朱敷不明
1-3	9	9層	瓦質	擂鉢	—	—	—	15~16c	動長系?	
1-4	6	4層	陶器	擂鉢	26.7	—	—	中世か	唐前	朱敷不明
1-5	5	14層	磁器	皿	—	6.7	—	16c	中国	
1-6	10	2~4層	磁器	皿	—	—	—	16c	景德鎮	
1-7	28	9~12層	磁器	皿	—	—	—	16c	-	青磁
1-8	22	5~9層	磁器	碗?	—	—	—	16c	中国?	白磁 二次焼成を受けている
1-9	15	13層	磁器	皿	—	—	—	16c	中国	青花 菩薩底
1-10	15	13層	磁器	碗	—	4.1	—	16c	中国	青花
1-11	27	1~4層	磁器	皿	—	7.2	—	16c	中国	白磁 (底の銘)○命?
1-12	27	1~4層	磁器	碗?	—	3.7	—	16c	中国	青花? 基筋底
1-13	15	13層	磁器	皿	10.2	5.9	2.5	16c 後	中国	青花 (見込み)壽?
1-14	28	9~12層	磁器	小皿	10	—	—	16c終	中国	青花
1-15	19	4層	磁器	中碗	11.5	—	—	16c末~17c	中國瀋陽窯	青花
1-16	11	井戸内	瓦質	擂鉢?	—	—	—	16c末	動長系?	
1-17	28	9~12層	陶器	皿?	—	—	—	戰國17c 鎌	志野	
1-18	15	13層	陶器	碗	—	5	—	16cか?	朝鮮?	砂目が多い
1-19	4	17~19層	陶器	皿	—	—	—	17c前~中古	瀬戸	
1-20	20	4~6層	磁器	皿	—	5.3	—	17c 中ば	-	染付 (内) 花文
1-21	10	6~7層	磁器	皿	—	—	—	17c 後	-	色絵 (内) 不明
1-22	6	3~4層	磁器	皿	—	8	—	17c 後	伊万里	染付 (外) 色絵 (内) 不明
1-23	24	9層	磁器	皿	—	7.2	—	17c 後半	-	染付 (内) 梅文
1-24	6	櫻亂上部	磁器	碗	—	3.8	—	17c か	伊万里	染付 (見込み) 花文 (外) 梅文 (底の銘) 太明
1-25	4	拂土	磁器	小皿	11.8	—	—	17c か	-	染付 (内) 不明
1-26	18	GL-80cm以下	陶器	碗	—	4.7	—	18c 前半	-	陶胎染付
1-27	1	4層	磁器	小碗	9.2	3.8	5	18c	-	染付 (外) 不明
1-28	1	1~7層	磁器	皿	—	6	—	18c	-	染付 (内) 不明
1-29	18	GL-80cm以下	磁器	仏龕器	—	3.6	—	18c	-	染付
1-30	18	GL-80cm以下	磁器	碗	—	4.2	—	18c	-	染付
1-31	16	5~6層	磁器	皿	—	4.6	—	18c	-	染付か 並の目袖割ぎ
1-32	19	4層	磁器	五寸皿	14.2	8	3.1	18c 台	-	染付 (内) 梅文 (外) 色絵文
1-33	28	9~12層	磁器	碗	—	—	—	18c	-	染付 (外) 梅文
1-34	20	4~6層	磁器	小皿	12.5	—	—	18c	-	染付 (内) 不明 (外) 色絵文
1-35	15	12層	陶器	甕?	—	—	—	18c 後期	九州系か	化粧織をしている
1-36	20	4~6層	磁器	中碗	12	—	—	18c	-	染付 (外) 色絵文 (口縁内) 四方博文
1-37	24	7層	磁器	蓋?	—	—	—	18c	国産	青磁
1-38	19	5層以下	磁器	皿	—	9.2	—	18c	-	染付 (内) 唐草文 (底の銘) あり
1-39	22	5~9層	磁器	皿	—	5.2	—	18c	-	染付 (内) 不明 (外) 唐草文 (見込み) 五弁花
1-40	28	9~12層	磁器	小皿	10.8	—	—	18c	-	染付 (内) 唐草文
1-41	20	4~6層	磁器	蓋	—	3.9	—	18c	-	染付 (外) 草? 蓬? (見込み) 五弁花
1-42	28	9~12層	磁器	碗?	—	—	—	18c	-	染付 (外) 草文?
1-43	10	2~4層	磁器	皿	—	15.3	—	18c	肥前	染付 (内) 不明
1-44	6	3層	磁器	碗	—	—	—	18c 終	-	染付 (外) 梵字文
1-45	2	1~5層	磁器	五寸皿	16.2	—	—	江戸後期	-	染付 (外) 色絵文 (内) 菊?
1-46	2	1~5層	磁器	五寸皿	14	8.6	2.3	18c~	久留	色絵 (内) 花文など
1-47	28	9~12層	陶器	被?	—	4.6	—	18~19c初	深川	朝鮮ガラスが溶けた釉彩
1-48	14	9層	磁器	紅焼口	4.6	1.5	1.6	18c頭	-	外型成型
1-49	14	9層	磁器	中碗	11.9	6.6	6.2	19c頭	肥前	染付 (外) 花文 (見込み) 不明
1-50	1	4層	磁器	皿	—	6	—	19c 頭	-	染付 (内) 不明
1-51	6	櫻亂上部	磁器	小碗	6.2	3.2	5.5	19c 頭	-	染付 (外) 極楽文 (内) 花文
1-52	14	9層	磁器	中碗	11.4	—	—	19c 頭	-	染付 (外) 福字
1-53	14	9層	磁器	五寸皿	14	9.4	3.8	19c 頭	-	染付 (内) 見込み) 梵文
1-54	14	9層	磁器	猪口	—	5.1	—	19c 頭	-	染付 (外) 草文 (底の銘) ○〇年〇か
1-55	14	9層	磁器	碗	—	4.8	—	19c 頭	-	染付 (見込み) 草文か (外) 八区面にわけてそれぞれに草花文
1-56	18	2層	磁器	小被蓋	7.4	3.1	2.4	19c 頭	-	染付 (外) 菊文
1-57	14	9層	磁器	中被蓋	10.2	5.3	2.4	19c 頭	肥前	染付 (内外) 花文
1-58	4	17~19層	陶器	鉢?	—	7.4	—	19c 江戸	萩	
1-59	19	5層以下	磁器	中碗	11.2	4.3	6.1	19c 江戸	-	染付 (外) 草花文・鳥 口鑄
1-60	28	9~12層	陶器	瓶?	—	—	—	19c?	萬葉抄? サビ鑄	
1-61	21	SK01	磁器	中碗	11.1	6	6.05	幕末~明治	小畑	染付 (外) 山・木
1-62	13	6層	磁器	合子	5	5.3	1.2	幕末~明治以降	-	染付
1-63	13	6層	磁器	蓋物蓋	9.3	4.9	—	幕末~明治以降	-	染付 (外) 亀甲文と草花?

第2表 第1次調査 出土遺物観察表②

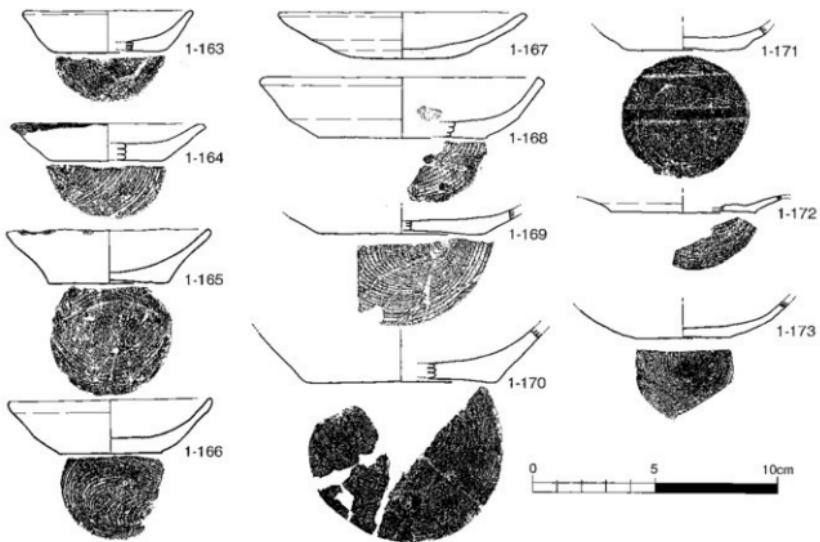
遺物番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)			年代	产地	文様等
					口径	底径	高さ			
1-54	1	8層	磁器	小瓶	11	6.8	2.2	昭和30年	自上(滋田)	プリント? (内)花
1-65	21	SK01	磁器	中碗	10.7	6.4	5.8	WWWⅢ前後	小坂	染付 (外)とんぼ・草? (底の鉢) 貴門塙田
1-66	20	4・6層	磁器	碗	-	6	-	WWWⅢ後	小坂	染付 (外)不明 (底の鉢) 長門塙田
1-67	5	12層	ガラス	ビン	2.2	5	6.4	-	-	底に「M」
1-68	5	12層	陶器	焼徳利	-	6	-	-	石見	○場
1-69	5	14層	陶器	碗	-	4	-	-	瀬川	數肌胎 脂生が粗く、1cm大の砂粒を多く含む。
1-70	6	4層	陶器	楕木鉢	-	10.6	-	-	瀬戸美濃	
1-71	6	複乱下部	ガラス	ビン	1.8	2.2	5.9	-	-	(外)「セリール」鉢、大阪 福井製
1-72	6	3層	陶器	壺?	-	-	-	-	九州系	
1-73	6	4層	磁器	薄手酒呑	8.3	-	-	肥前	染付 (口縁内)墨揮き	
1-74	6	3層	陶器	小瓶	7.4	3.5	3.9	-	須佐	演佐唐津
1-75	10	6・7層	陶器	壺?	-	4.8	-	-	津和野近辺	
1-77	10	6・7・8層	磁器	碗	-	-	-	-	中国	青磁
1-78	11	井戸内	磁器	碗	-	-	-	-	伊万里?	色絵
1-79	11	井戸内	磁器	段重	10.5	9	-	-	-	染付 (外)サギ? 文?
1-80	11	井戸内	磁器	小瓶	7.8	3.2	5.25	-	-	染付 (外)花文と蝶
1-81	11	井戸内	磁器	小瓶	9.2	3.5	5	-	-	染付 (外)草文、鳥など (見込み)花? (口縁内)墨揮き
1-82	11	井戸内	磁器	中碗	11.2	6	5.9	-	-	染付 (外)草? (見込み)不明
1-83	11	井戸内	陶器	灯明皿台	6	4.4	4	-	-	
1-84	11	井戸内	磁器	紅猪口	4.8	1.9	1.75	-	-	
1-85	11	2層	陶器	碗	-	2.8	-	-	-	
1-86	11	井戸内	磁器	仏鼻瓶	7	3.7	6.15	-	-	染付 (外)半蘭文
1-87	11	2・3・4層	磁器	中碗	10.8	5	6.55	-	小坂か	染付 (外)山、木 見込みに既成時に接着したような釉薬の団まりが付着
1-88	11	井戸内	陶器	灯明皿	8.6	3	2.05	-	-	目跡4つあり
1-89	11	井戸内	磁器	中碗	12.3	4.5	6.9	-	-	染付 (外)人 (見込み)円
1-90	11	2層	陶器	壺?	5.6	4	2.95	-	-	
1-91	11	井戸内	瓦質	火鉢	18.4	-	-	-	-	
1-92	11	井戸内	陶器	五寸皿	16.6	6.8	4.2	-	-	
1-93	13	6・7層	磁器	中碗	10	-	-	-	-	染付 (外)見込み稻東
1-94	13	6層	磁器	中碗	10	3.7	4.8	-	-	染付 (外)松文
1-95	13	6層	陶器	灯明皿台	5.3	3.1	2.2	-	-	
1-96	13	6層	磁器	紅猪口	4.9	1.2	1.5	-	-	外型成型
1-97	13	6層	磁器	紅猪口	4.8	10.4	1.6	-	-	外型成型
1-98	13	6層	陶器	中碗	12.3	4.9	5.8	-	瀬川	
1-99	13	7層	瓦質	火鉢	-	-	-	-	-	型押あり
1-100	13	7層	磁器	壺?	-	-	-	-	-	青磁?
1-101	14	7層	衛器	灯明皿	10.7	4.4	2.35	-	-	糸切痕 目跡1つ
1-102	14	7層	陶器	灯明皿	10.7	4.4	2.35	-	-	糸切痕 目跡1つ
1-104	14	SK	磁器	中碗	10	3.2	4.45	肥前	染付 (内外)鈴造文	
1-105	14	SK	陶器	小瓶	9	3	5.5	-	京焼系	
1-106	14	9層	陶器	中鉢	19.2	8.6	9.7	-	瀬川	
1-107	14	9層	陶器	壺?	-	-	-	-	唐津	
1-108	14	9層	瓦質 SK	陶器	中皿	21.7	9	5.9	-	須佐 のみ模あり 目跡5つ
1-109	11	井戸内	陶器	椎鉢	30.3	10.4	13.2	-	須佐	椎目21条
1-110	11	2層	陶器	壺?	-	16.8	-	-	肥前	たたき痕あり
1-111	15	12層	陶器	碗	-	5	-	-	京焼系	輪付 (底の鉢) 判読不明だが何か押している?
1-112	15	13層	陶器	碗	-	5	-	-	-	陶胎染付 (外)不明
1-113	15	13層	陶器	壺?	-	4	-	-	-	陶胎染付
1-114	15	13層	陶器	小碗	8.6	-	-	-	京焼	
1-115	15	13層	陶器	灯明皿	8.7	3	1.95	-	須佐	目跡2つあり
1-116	15	13層	陶器	餅油盃	2.2	-	-	-	備前	
1-117	16	1~4層	陶器	碗	-	3.8	-	-	京焼系	陶胎給付
1-118	16	5・6層	陶器	壺?	-	3.7	-	-	京焼	給付 (内)竹文
1-119	16	1~4層	陶器	壺?	-	3.4	-	-	布志名	
1-120	16	5・6層	陶器	碗	-	3.8	-	-	京焼	給付 (外)草文
1-121	16	5・6層	陶器	碗	-	4.6	-	-	瀬川	
1-122	16	5・6層	陶器	漆鉢	-	11.2	-	-	須佐	のみ模あり 条数不明
1-123	18	GL-80cm以下	陶器	皿	-	14.8	-	-	瀬戸	給付 (内)草文
1-124	18	2層	陶器	灯明皿	11	-	-	-	関西系	針跡1つあり
1-125	18	GL-80cm以下	陶器	灯明皿	11.4	4.9	2.2	-	関西系	一部煤が付着 針跡2つあり
1-126	19	5m以下	磁器	中碗	12.4	-	-	-	中國	
1-127	20	4・6層	磁器	碗?	13	-	-	-	中國	青花
1-128	20	7・8層	陶器	灯明皿	9.1	3.8	3.65	-	須佐	
1-129	20	7・8層	磁器	中碗	11.5	5.7	5.4	-	小坂	染付 (底の鉢) (長門?) 塩田

第3表 第1次調査 出土遺物観察表(③)

遺物番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm) 口径 底径 器高			年代	産地	文様等		
					口径	底径	器高					
1-130	21	SK01	磁器	伝施器	6.6	—	—	—	—	染付 (外)唐草文		
1-131	21	3層	磁器	皿	—	7.8	—	—	中國	青花 (内外)不明		
1-132	28	9~12層	陶器	碗	—	4.2	—	—	—	陶胎染付		
1-133	21	3層	陶器	火鉢	12.2	6.8	9.3	—	—	焼?	鈴山所在地で使用される緑色釉薬使用	
1-134	21	3層	陶器	擂鉢	31.4	—	—	—	須佐	鉢底 擾目15枚		
1-135	21	SK01	陶器	擂鉢	32.8	—	—	—	須佐	灰釉陶器		
1-136	24	9層	土製品	埴輪	7.6	2.5	3	—	—	素焼き		
1-137	28	9~12層	瓦質	火鉢	64.2	—	—	—	—			

遺物番号	調査区	層位	種別	器種	文様等					石・瓦 法量(cm) 長 幅 高		
					残存	残存	復元	残存	復元	残存	復元	残存
1-138	4	17~19層	赤瓦	軒丸瓦	周縁径2.7cm	左巻三巴文		残存	2	残存	復元	15
1-139	14	9層	焼瓦	軒丸瓦	周縁径2.7cm	左巻三巴文		残存	2.8	—	瓦当	15.4
1-140	24	6層	赤瓦	鳥伏筒瓦	周縁径1.8cm	菱形一文字		—	—	—	瓦当	14
1-141	3	10~11層	赤瓦	鬼瓦	右巻三巴文1つあり			残存	19.4	残存	—	
1-142	14	4層	赤瓦	軒平瓦	瓦当幅3.5cm	額部幅2.2cm 中心熱模		残存	2.2	残存	—	
1-143	5	12層	赤瓦	軒平瓦	瓦当幅3.8cm	額部幅2.3cm 中心熱不明 穿孔あり		残存	27.6	残存	—	
1-144	14	9層	赤瓦	軒平瓦	瓦当幅3.3cm	額部幅2.4cm 中心熱模 唐草		残存	3.3	残存	—	
1-145	14	9層	赤瓦	軒柱瓦?	瓦当幅4.6cm	額部幅1.7cm 中心熱不明 莖と唐草上に一軸下に二軸		残存	4.7	残存	—	
1-146	6	3層	赤瓦	軒柱瓦	瓦当幅4.6cm	額部幅1.6cm 穿孔1つあり 中心熱三葉 唐草下に二軸、上に三軸		残存	27.7	残存	—	
1-147	3	11~12層	赤瓦	軒平瓦	瓦當部以外の外側色調にぶい赤褐色。額部幅2.5cm。 中心熱三葉? 唐草と蔓上に二軸、下に一軸			残存	16.4	残存	—	
1-147	5	14層	赤瓦	軒柱瓦	瓦當幅4.1cm	額部幅2cm		残存	12.8	残存	—	
1-149	6	搅乱上部	赤瓦	軒柱瓦	瓦当幅3.8cm、額部幅2.5cm	中心筋三葉? 唐草上に一軸		残存	14.5	残存	—	
1-150	3	10~11層	赤瓦	丸瓦				残存	13.8	残存	—	
1-151	1	1~7層	赤瓦	丸瓦	玉縁部分欠損			残存	13.3	残存	—	
1-152	14	9層	焼瓦	楕瓦?				残存	12.7	残存	—	
1-153	14	9層	赤瓦	丸瓦				残存	7.8	残存	—	
1-154	15	13層	焼瓦	丸瓦	スタンプあり			残存	10.3	残存	—	
1-155	4	17~19層	焼瓦	丸瓦?	スタンプ、穿孔1つづつあり			残存	7.2	残存	—	
1-156	14	SK	焼瓦	海鼠瓦				残存	5	残存	—	
1-157	3	11~12層	焼瓦	海鼠瓦	胎土にぶい赤褐色の粒を含む。穿孔? あり			残存	6.1	残存	—	
1-158	5	12層	焼瓦	海鼠瓦				残存	6.3	残存	—	
1-159	13	5層	焼瓦	海鼠瓦				残存	15.2	残存	—	
1-160	14	8層	赤瓦	椎瓦	椎幅5.3cm			残存	18.8	残存	—	
1-161	4	17~19層	焼瓦	平瓦	スタンプ、穿孔1つづつあり			残存	19.2	残存	—	
1-162	5	12層	焼瓦	平瓦	[○]スタンプ、穿孔2つあり			残存	24.1	残存	—	

遺物番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm) 口径 底径 器高			年代	産地	文様等		
					口径	底径	器高					
1-163	25	9層	土師器	皿	6.8	4.7	1.7	-	-	胎土1~2mmの石を微量に含む 燃成良好		
1-164	20	7~8層	土師器	灯明皿	7.6	4.5	1.55	-	-	胎土1mm大の石を微量に含む 燃成良好 糸切痕		
1-165	14	9層	土師器	灯明皿	8.4	5	2.2	-	-	余切痕 油土2mmの石を微量に含む 燃成良好 灯明痕		
1-166	25	9層	土師器	灯明皿	8.4	4.2	2.2	-	-	胎土1~2mmの石を微量に含む 燃成良好 繡封蓋		
1-167	19	5層以下	土師器	灯明皿?	10.2	3.6	1.9	-	-	胎土密 燃成良好 糸切痕 ほぼ全面に煤付着		
1-168	14	9層	土師器	灯明皿?	11.1	6.8	2.5	-	-	胎土密 燃成良好 糸切痕 内面にやや煤が付着		
1-169	13	6層	土師器	皿	-	6.6	-	-	-	胎土密 燃成良好 糸切痕		
1-170	14	SK	土師器	皿	-	7.8	-	-	-	胎土密 燃成良好 糸切痕		
1-171	6	4層	土師器	皿	-	4.7	-	-	-	底面は糸切後、板等で押さえられた跡あり		
1-172	13	2層	土師器	灯明皿	-	6	-	-	-	胎土密 燃成良好 条切痕 全体に煤が付着		
1-173	14	SK	土師器	皿	-	3.8	-	-	-	胎土密 燃成良好 糸切痕		



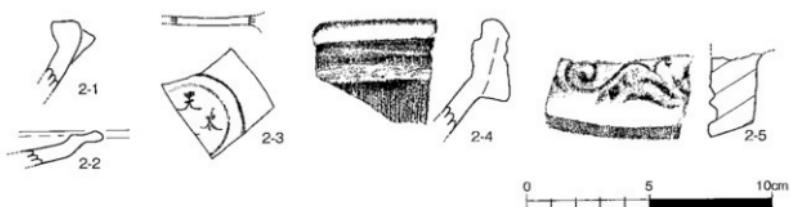
第37図 第1次調査 出土遺物②

### 3. 第2次調査の出土遺物

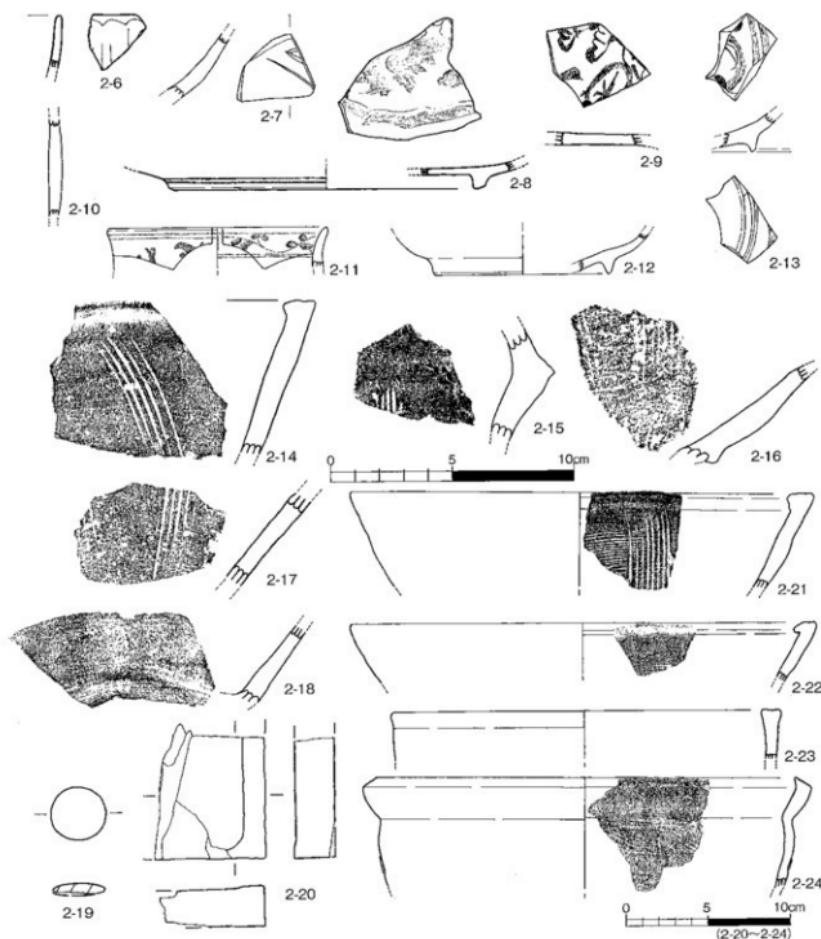
第2次調査からは、陶磁器類がパンコンテナー3箱、瓦類4箱、石製品4箱からなる遺物が出土している。その内訳は、近世以降の陶磁器をはじめ、土師質の灯明皿、瓦類（焼瓦・赤瓦）などがほとんどであり、下層から僅かであるが中世時代の陶磁器や土師器類が出土している。第1次調査箇所と隣接していることから同様な遺物の出土状況であった。参考までに出土物（陶磁器類）の割合を集計すると、凡そ肥前系磁器39%、陶器類39%、地元産20%、青磁・白磁2%であった。

また、第2次調査を実施する以前に試掘調査を行っているので、その時に出土した遺物についても併せて記載する。

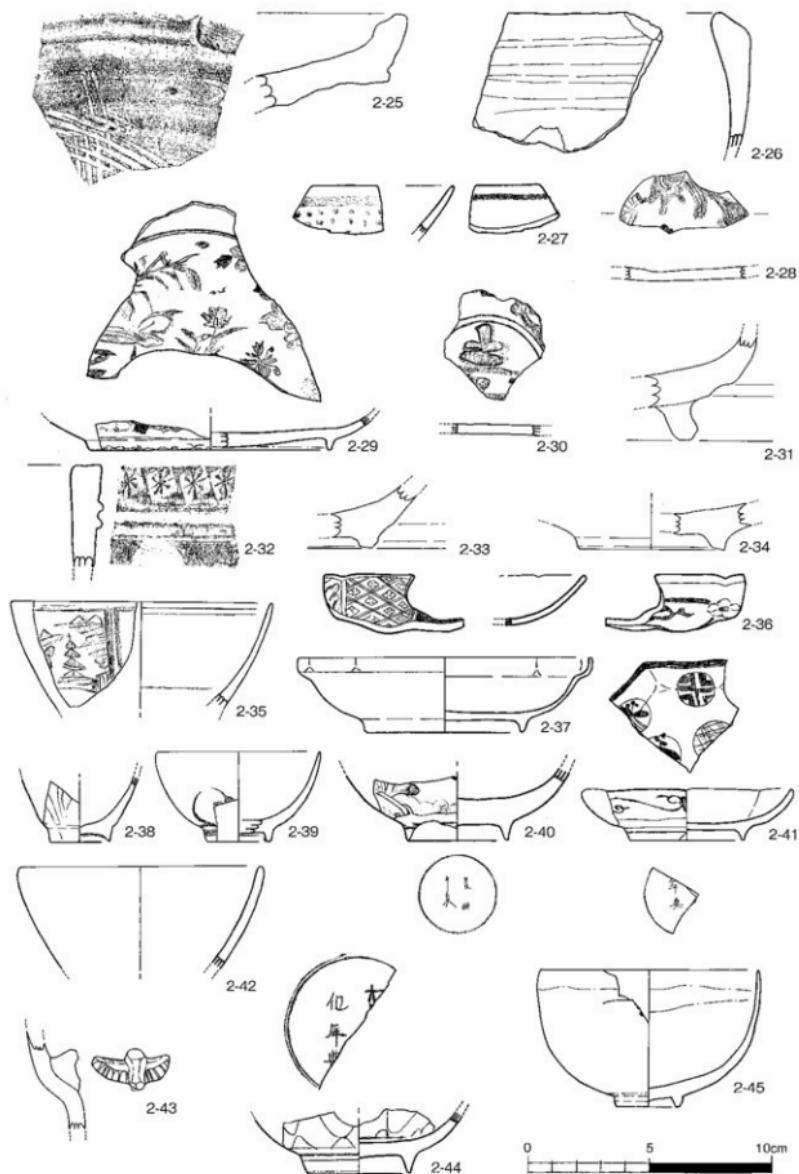
本報告書では、試掘調査出土遺物から3点、第2次調査出土遺物から108点を選び、実測図・写真を掲載し、その内容は遺物観察表をもって説明に代えたい。



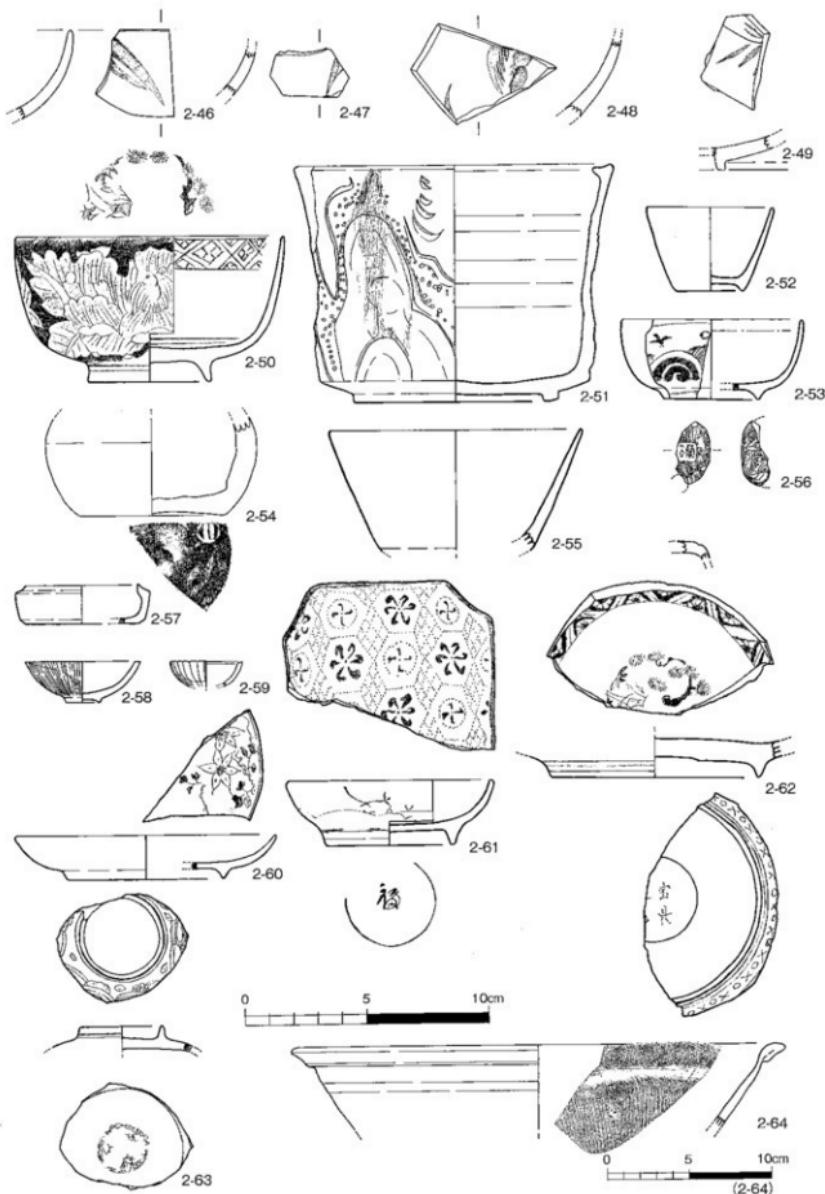
第38図 試掘調査 出土遺物実測図



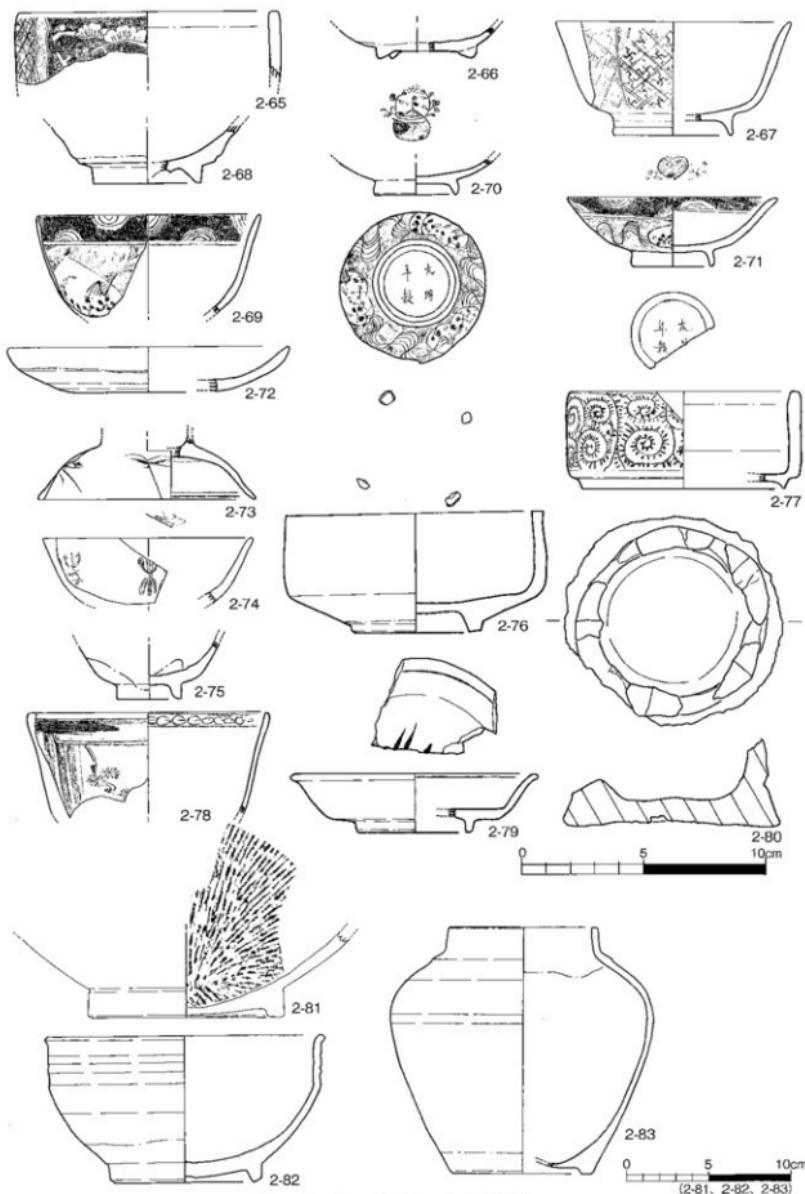
第39図 第2次調査 出土遺物①



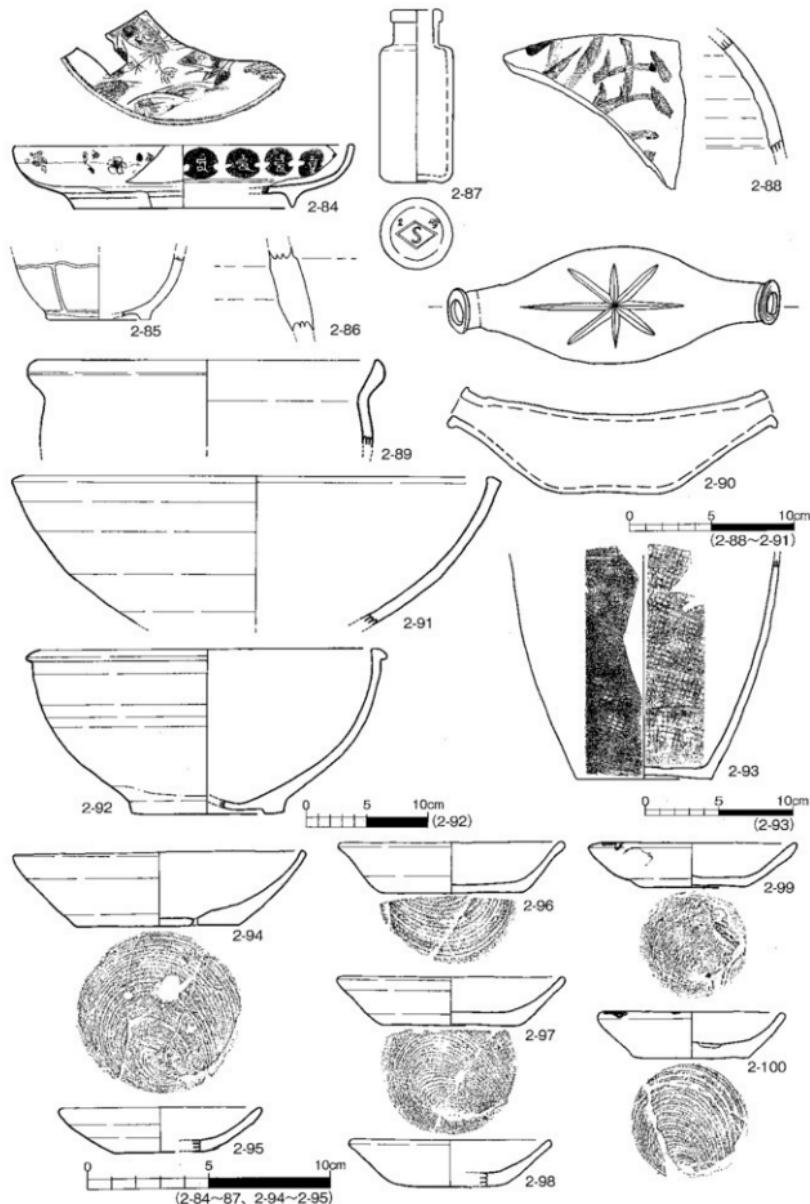
第40図 第2次調査 出土遺物②



第41図 第2次調査 出土遺物③



第42図 第2次調査 出土遺物④



第43図 第2次調査 出土遺物⑤



2-101



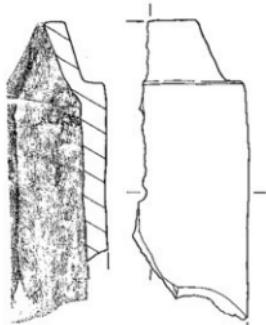
2-102



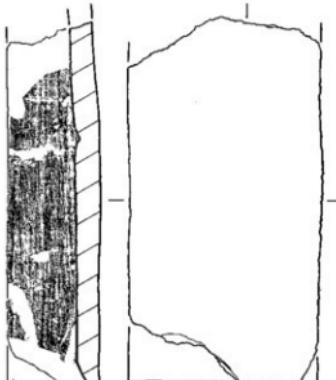
2-103



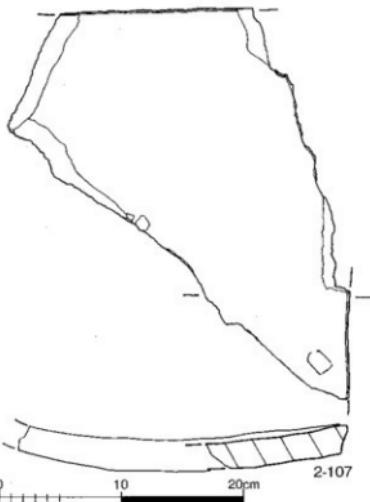
2-104



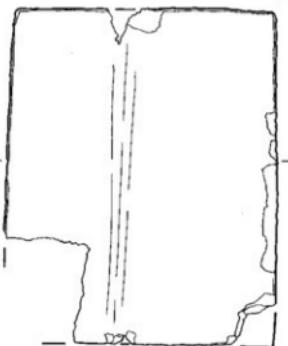
2-105



2-106



0 10 20cm 2-107



2-108

第44図 第2次調査 出土遺物⑥

第4表 試掘調査 出土遺物観察表

遺物番号	調査区	層位	種別	器種	古墳(㎝)			年代	产地	文様等
					口径	底径	高さ			
2-1	S4-C	GL-100~120cm	瓦質	埴輪	—	—	—	16c	防長	片口口縁
2-2	S4-C	GL-60~70cm	磁器	皿	—	—	—	—	—	白磁
2-3	S4-C	茶畠より上	磁器	皿	—	—	—	—	中国	青花 (底の緑)天○太○?
2-4	S4-C	GL-60~70cm	同上	埴輪	—	—	—	—	備前	模様不明
2-5	S4-C	GL-100~120cm	瓦質	埴輪	腰平丸	腰平丸	2.2 (底有無5.5)	—	—	腰平丸2cm 中心陶三葉? 青磁の一つは上向きに一枚

第5表 第2次調査 出土遺物観察表①

遺物番号	調査区	層位	種別	器種	古墳(㎝)			年代	产地	文様等
					口径	底径	高さ			
2-1	S4-C	GL-100~120cm	瓦質	埴輪	—	—	—	16c	防長	片口口縁
2-2	S4-C	GL-60~70cm	磁器	皿	—	—	—	—	—	白磁
2-3	S4-C	茶畠より上	磁器	皿	—	—	—	—	中国	青花 (底の緑)天○太○?
2-4	S4-C	GL-60~70cm	陶器	埴輪	—	—	—	—	備前	模様不明
2-6	9	60~75cmまで	磁器	皿	—	—	—	15c~16c	中国	沈様あり
2-7	9	80~60~70cm	磁器	皿	—	—	—	—	—	—
2-8	9	90~60~70cm	磁器	皿	—	—	—	—	—	—
2-9	3	—~20cmまで	磁器	皿	—	—	12.5	—	—	—
2-9	1	80~95cmまで	磁器	皿	—	—	—	16c	中国	青花 (底の緑)天○太○?
2-10	7	70~停止面まで	陶器	香炉	—	—	—	—	中国	—
2-11	10	—	陶器	小瓶	9	—	—	16c	中国	青磁 鎌倉文
2-12	1	—	陶器	皿	—	7.2	—	16c	中国	白磁
2-13	2	—	陶器	皿	—	—	—	16c	中国	青花
2-14	2	—~70~90cmまで	瓦質	埴輪	—	—	—	16c	防長	模様5条
2-15	1	—~80~95cmまで	陶器	埴輪	—	—	—	16c	備前	模様不明
2-16	1	—~80~95cmまで	瓦質	埴輪	—	—	—	16c	防長	模様が激しい
2-17	10	—~100~停止面まで	瓦質	埴輪	—	—	—	16c	防長	模様5条
2-18	1	—~30~35cmまで	瓦質	皿	—	—	—	16c	—	—
2-21	1	—~30~35cmまで	瓦質	度母	27.8	—	—	16c	防長	模様8条?
2-22	1	—~95~120cmまで	瓦質	度母	29	—	—	16c	防長	模様不明
2-23	1	—~10~30cmまで	瓦質	火鉢	23.6	—	—	16c	—	—
2-24	1	—~30~35cmまで	瓦質	瓶	25.7	—	—	—	—	—
2-25	1	—~80~95cmまで	陶器	度母	—	—	—	16c後~17c	備前	度母埴輪5頭 模様不明
2-26	10	開始面~25cmまで	瓦質	火鉢	—	—	—	16c~17c初	—	—
2-27	2	—~70~90cmまで	陶器	瓶	—	—	—	16c~17c	中国	青花
2-28	3	—	陶器	皿	—	—	—	16c~17c	中国	青花
2-29	8	—~30~60cmまで	度母	大皿	—	16.4	—	16c~17c	中国	青花 雜誌頭 (内)草花文? (外)不明
2-30	1	—~95~120cmまで	度母	皿	—	—	—	16c~17c	中国	青花 (見込み)青?
2-31	6	—	度母	香炉	—	—	—	16~17c	中国	青磁
2-32	10	—~20~40cmまで	瓦質	火鉢	—	—	—	16c~17c	—	印文字
2-33	2	—	陶器	度母	—	—	—	17c前	青津	—
2-34	1	—	陶器	度母	—	6	—	17c	青津	—
2-35	6	—~60~80cmまで	度母	中碗	10.6	—	—	17c後~18c前	肥前	染付 (外)鹿
2-36	9	度母取り上げ	度母	度母	—	—	—	—	—	上絵付 金ラン手
2-37	7	—~70~90cmまで	度母	度母	12	6.4	3.1	17c末~18c初	肥前	ロサビ ホワイト
2-38	2	—~70~90cmまで	度母	小杯	—	2.4	—	17c末~18c初	肥前	色絵 (外)柳文
2-39	6	—~60~90cmまで	度母	小鏡	6.7	2.6	3.7	18c初	肥前	染付 (外)草文?
2-40	10	—~20~40cmまで	度母	丸鏡	—	4	—	18c前	佐佐見	くらわんか 染付 (外)草文 (底の緑)大明年製
2-41	9	度母取り上げ	度母	度母	8.8	4.6	2.15	17c末~18c初	一	染付 ロサビ (外)唐草文 (内)丸文 (底の緑)○年製
2-42	10	—~20~40cmまで	度母	中碗	10	—	—	18c前	京焼	京焼風
2-43	8	—	度母	花瓶	—	—	—	18c前	肥前	青磁、鳥形の捨み
2-44	9	渕に伴う遺物	度母	丸鏡	—	4.2	—	18c前~中	肥前	染付 (内外)桐文 (見込み)木○年○
2-45	6	—~50~90cmまで	陶器	小鏡	8.9	2.6	5.65	18c末~19c	京焼	—
2-46	7	—~70~90cmまで	陶器	度母	—	—	—	18c中~後	京焼	—
2-47	7	—~70~90cmまで	陶器	度母	—	—	—	18c中	京焼	—
2-48	7	—~70~90cmまで	陶器	度母	—	—	—	18c中	京焼	—
2-49	7	—~70~90cmまで	陶器	度母	—	—	—	18c中	京焼	—
2-50	7	—~70~90cmまで	度母	度母	11	5	6	18c後(1770~)	肥前	染付 (見込み)松竹梅 (外)牡丹 (口縁内)四方桐文
2-51	7	—~70~90cmまで	度母	度母	32	21	24.2	18c	瀬戸	鉄瓶 波永文 珍状の刺突 目跡4つ
2-52	10	—~60~65cmまで	度母	鏡口	5	2.7	3.5	18c	肥前	染付 (外)波と鳥
2-53	9	—~60~75cmまで	度母	小鏡	7.2	3.8	3.3	18c	肥前	人形とくっきり、底部にスタンプ文
2-54	10	—~60~75cmまで	度母	小鏡	—	—	—	18c	肥前	青磁
2-55	3	—~50~65cmまで	度母	中碗	10.2	—	—	18c末	—	—
2-56	7	—~20~35cmまで	土器	蓋付	—	—	—	18c末~19c	—	蟹押捺染文様・葉状文 (路)●茎 外面に赤漆添付、文人趣味の影響が認められる
2-57	9	—~60~75cmまで	合子	合子	4.5	4.6	1.6	18c~19c	肥前	白磁
2-58	7	—~70~90cmまで	度母	紅皿	4.8	1.3	1.7	18c~19c	肥前	外型成形
2-59	10	—~20~30cmまで	陶器	小皿	3	—	—	—	—	—
2-60	3	開始面~20cmまで	度母	小皿	10.6	6.3	1.8	18c中~19c	肥前	染付 (内)花文 火を受ける
2-61	7	—~70~90cmまで	度母	度母	8.4	5.2	2.7	18c後~19c初	—	染紙刷り (外)草文 (底の緑)複
2-62	2	—~20~30cmまで	度母	皿	—	8.5	—	18c後~19c初	肥前	染付 (内)不明
2-63	2	—~20~30cmまで	度母	度母	—	3.3	—	18c後~19c	肥前	染付 (見込み)松竹梅文 (高台脚)○X文 (内)不明
2-64	6	—~60~80cmまで	度母	度母	60.2	—	—	18c後	肥前	模様不明
2-65	3	—~20~30cmまで	度母	度母	10.6	—	—	18c末~19c	肥前	染付 (外)松文、斜格子
2-66	3	—~20~30cmまで	度母	度母	—	—	—	18c末~19c	—	三足
2-67	6	—~40~60cmまで	度母	小鏡	9.6	4.5	4.7	19c初	—	染付
2-68	6	—~40~60cmまで	度母	度母	—	4.4	—	19c	萩	—
2-69	3	—~20~30cmまで	度母	度母	9	—	—	19c初	肥前	染付 (内外)不明
2-70	3	開始面~20cmまで	度母	度母	—	3.3	—	—	染付 (見込み)松竹梅文 (底の緑)大明年製	—
2-71	3	—~20~30cmまで	度母	小皿	8.6	3.2	2.9	19c初	肥前	染付 (見込み)松竹梅文 (外)不明
2-72	6	—~60~80cmまで	度母	小皿	11.4	6	1.9	19c	石見	目隠一つ
2-73	6	—~60~80cmまで	度母	小皿	8.8	—	—	19c	肥前	染付 (外)蝶と草 (見込み)不明
2-74	8	—	度母	度母	8.6	—	—	19c中~暮末	瀬戸	碧
2-75	7	開始面~20cmまで	度母	度母	—	2.6	—	19c山形	ピラギ	—

第6表 第2次調査 出土遺物観察表②

遺物 番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)			年代	産地	文様等
					口径	底径	高さ			
2-76	8	-30~60cmまで	陶器	香炉?	10.5	5.3	4.9	19c	石見	
2-77	3	-20~30cmまで	磁器	段巻	9.2	8.2	4	19c	尾道	染付 (外) 銀唐草文
2-78	6	-60~80cmまで	磁器	中巻	9.8	—	—	幕末~明治	—	染付 肥前系 (外) 松文 (口縁内) 不明
2-79	8	8区-60~70cm	陶器	陳皿	9.6	4.6	2.4	明治以降	不明	太白手 白い輪廻に草文
2-80	7	-20~35cmまで	陶器	穿孔具	—	8.9	3.6	—	19c	
2-81	1		陶器	推鉢	—	12	—	19c	須佐	
2-82	1	-10~30cmまで	陶器	小鉢	16.4	8.5	8.9	19c	石見	目詰 4つ 縦折口縁
2-83	4	-30~70cmまで	陶器	中巻	8.8	6.4	15.05	明治以降	石見	
2-84	10	-20~40cmまで	磁器	小皿	14	9	2.6	19c	肥前	染付 (内) 魚と水草 (外) 草花文 一枚絵
2-85			磁器	碗	—	4.2	—	—	青磁	
2-86	2		磁器	盃	—	—	—	—	炳海	
2-87	4	-30~70cmまで	ガラス	瓶	1.8	2.2	7.1	—	—	(底面) S 2号
2-88	7	開始面~-20cmまで	陶器	瓶	—	—	—	明治以降	石見	「塙酒器」か?
2-89	10	-100~-停止面まで	瓦質	盤	20.7	—	—	—	—	
2-90	4	-30~70cmまで	ガラス	瓶	25/27	6.3	6.4	—	—	
2-91	9	底部時取り上げ	陶器	大鉢?	27.8	—	—	—	—	
2-92	7	-20~35cmまで	陶器	程鉢	27.8	12.4	13.45	19c	石見	目詰 3つ 漢書があるが判読不明
2-93	7	-70~停止面まで	陶器	大甕	—	18.4	—	—	—	

遺物 番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)			年代	産地	備考
					口径	底径	高さ			
2-94	7	-70~停止面まで	土陣器	皿	12.1	6.6	3	—	—	灯明道か?
2-95	6	-50~90cmまで	土陣器	皿	8.2	3.8	1.8	—	—	
2-96	7	-70~停止面まで	土陣器	皿	9.4	5.8	2.1	—	—	
2-97	7	-70~停止面まで	土陣器	皿	9.4	5.6	2	—	—	
2-98	3	-20~30cmまで	土筋器	皿	8.2	4.5	1.95	—	—	灯明道
2-99	7	-70~停止面まで	土筋器	皿	8.6	4.3	1.8	—	—	灯明道
2-100	7	-70~停止面まで	土筋器	皿	7.7	4.6	1.9	—	—	灯明道

遺物 番号	調査区	層位	種別	器種	石・瓦 法量(cm)			年代	産地	文様等
					長	幅	厚			
2-101	7	-70~停止面まで	赤瓦	軒瓦	現存	残存	復元	瓦当	御前中央は灰褐色 周縁は2.2cm 右巻きの三巴文	
2-102	3	開始面~-20cmまで	赤瓦	軒平瓦	現存	残存	11	13.7	14	2
2-103	7	-20~35cmまで	赤瓦	軒平瓦	現存	残存	9.1	—	1.8	隅部幅1.8cm 瓦当幅4.1cm 中心丸三葉 鹿草上に三輪下に一輪
2-104	4	-30~70cmまで	赤瓦	軒板瓦	現存	残存	8.3	—	1.6	隅部幅1.6cm 瓦当幅4.5cm 鹿草上に二輪下に二輪
2-105	7	-70~停止面まで	赤瓦	丸瓦	現存	残存	9	15.7	—	1.6 隅部幅1.8cm 中心飾繩 瓦当幅4.5cm 上向の鹿草と柱葉
2-106	6	発掘停止面	赤瓦	丸瓦	現存	残存	22.8	9.4	—	穿孔2つあり
2-107	6	-60~80cmまで	焼瓦	平瓦	現存	残存	29.8	15.5	—	1.7 玉縫目欠損
2-108	9	溝に伴う遺物	焼瓦	平瓦	現存	残存	26	23.6	—	穿孔・指圧痕

遺物 番号	調査区	層位	種別	器種	石・瓦 法量(cm)			年代	産地	備考
					長	幅	厚			
2-109	9	試掘時取り上げ	石製品	基石	—	—	—	—	—	
2-200	8	-30~60cmまで	石製品	礎	残存	残存	6.8	—	2.3	

#### 4. その他の遺物（津和野城下町遺跡から出土した「鍋島写し」）

阿部賢治（島根県埋蔵文化財調査センター）

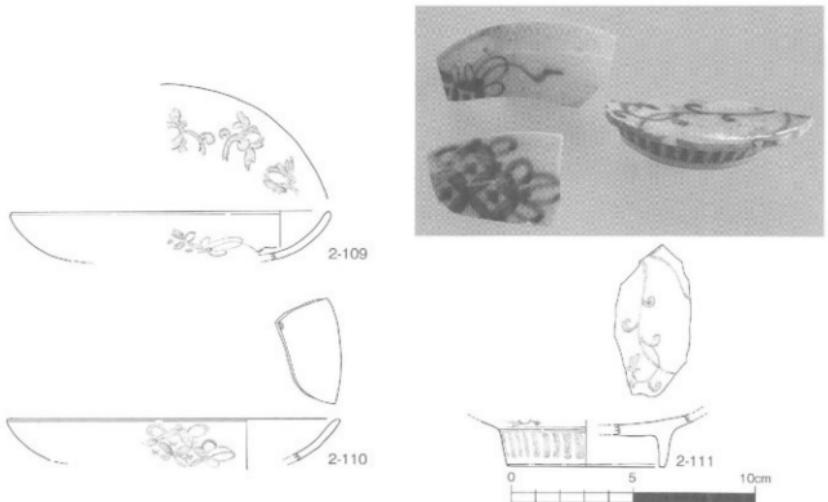
鍋島焼は佐賀藩が將軍献上を主目的とした最高級の磁器として有名である。津和野城下町遺跡の調査から鍋島焼の意匠を模倣した数点の磁器皿が出土しており、本報文ではこれを便宜的に「鍋島写し」として報告する。

遺物包含層の上層部より近代以降の遺物と共に7点の「鍋島写し」の碎片が出土し、そのうち状態が比較的良好い3点（1～3）の実測図を掲載している。出土した「鍋島写し」はいずれも染付皿である。1は口縁部であり、外側に重複して並ぶ七宝結び文が絵付けされる。七宝の輪郭を線描きし、内側を濃みで塗りつぶしている。絵付けは粗雑で形状も不揃いである。2も口縁部であり、外面に七宝結び紋、内面に唐草文がそれぞれ絵付けされる。唐草文も輪郭線を細線で描き、内側を濃みで塗りつぶしている。3は染付皿の高台部分であり、疊付部分は釉剥ぎされている。高台側面には櫛歯文が絵付けされ、高台上端部に團線が入る。体部外面に七宝結び文、内面に唐草文が配される。この3点の他にも体部の碎片2点と高台の碎片2点が出土しており、高台脇の櫛歯文の違いなどから少なくとも2個体以上が存在していたことを確認できる。釉薬は透明釉と呉須を使用している。いずれも木盃形の皿に高台櫛歯文と裏文様に七宝結び文を配しているので、盛期鍋島の基本的な特徴を捉えている。本来の鍋島焼は佐賀藩官窯として高度な分業体制により精緻な製品を生産しているが、これら出土遺物の形状は不揃いであり絵付けは粗雑である。また鍋島焼では三寸・五寸・七寸・一尺サイズの定形皿が生産されたとされるが、出土遺物1・2の復元口径は13cm大（約四寸）である。鍋島焼の意匠や特徴は取り入れられているものの、作りと作風が粗雑であることから模倣品と考えた。

遺跡地は幕末には藩校養老館の鍊兵場となっており、大正期から昭和にかけて堀酒場として酒屋が営まれていた。昭和4年以降は、私立幼稚園として利用されている。共伴遺物と土地利用状況から、これらの「鍋島写し」は堀酒場を前後する時期に一括廃棄されたものと推測される。

鍋島焼は將軍献上品として生産された経緯から、江戸城・大名屋敷・旗本地など江戸武家地を中心に出土例が報告される。一方で、宿場町の内藤町遺跡（新宿区）や農村遺跡の上柏屋・上尾崎遺跡（神奈川県）からも出土しており、鍋島焼の一部は実用的な大皿として市井（しせい）の料亭に流出していたようである。また「鍋島写し」に類した出土例はできなかったが、このことは、將軍家へ配慮した佐賀藩が、鍋島焼の意匠を民窯に転用することを禁止したことにも関わるのであろう。

近代以降、海外の博覧会に出演された日本の工芸品は高い評価を受け、江戸後期の文人趣向とは異なる欧米人が好む精緻な装飾を施した製品が盛んに輸出された。この頃、日本の美術工芸品の海外流出が相次いだこともあり、国内保護への关心とともに工芸史研究も盛んとなった。瀟洒な作品を多く残した野々村仁清の再評価もこの時期であり、鍋島焼に関する研究も大正から昭和にかけて機運が高まったとされる。おそらくは本遺跡で出土した「鍋島写し」は、鍋島焼が生産されていた江戸期ではなく、近代以降に国内外における美術工芸への再評価が高まった時代背景のなかで作成されたものではないかと考えられる。



第45図 その他の出土遺物実測図

番号	出土位置	材質	器形	底形	法量 cm			胎土	釉薬	文様			装飾	備考	推定產地
					口径	底径	器高			外面	内面	高台彌座			
2-109	II-3	磁器	木蓋形皿	椭圓	(13.8)	-	-	白色	呉須・透明釉	七宝結び文・(唐草文)	-	-	染付	鍋島写し	-
2-110	II-3	磁器	木蓋形皿	椭圓	(13.4)	-	-	白色	呉須・透明釉	七宝結び文・(牡丹)唐草文	-	-	染付	鍋島写し	-
2-111	S4-C	磁器	木蓋形皿	椭圓	-	(6.4)	-	白色	呉須・透明釉	-	(牡丹)唐草文	樹葉文	染付	鍋島写し	-

第7表 その他の出土遺物観察表

#### 参考文献

『將軍と鍋島・柿右衛門』 大橋康二 雄山閣 2007年

『国宝仁清の謎』 岡佳子 角川叢書 2001年

『第13回九州近世陶磁学会 鍋島の生産と流通－出土資料による－』 九州近世陶磁学会 2003年  
本稿をまとめるにあたり、大橋康二氏、鈴木裕子氏、内田律雄氏から多くのご教示と援助を受けました。末筆でありますが記して謝意を表します。

#### 5. 小 結

第1次・2次調査両方からの出土遺物から遺跡を検証してみると、まず古い時代のものとして15～16世紀の陶磁器や遺物が出土しているが、それ以前の時代の遺物は確認されなかった。このことは、本調査区が中世頃に整備された区域であり、それ以前の地形はおそらく津和野川が流れていたと場所であったからである。そのため、今までの調査成果からも矛盾するところはなく、そのことの証拠となる結果が本調査においても得られたと言える。

出土遺物の殆どが近世以降のものであった。そして、調査区域が武家屋敷地内であったことから、出土品は比較的高価なものが多く出土している。また、火を受けた遺物も多く、焼土層との関連から大火の証拠としても重要な資料が得られた。

## 第4章 まとめ

今回調査を実施した地点は、城下町においても特に重要な地点である殿町地区の一画を調査した。本調査が開発事業に伴う緊急の調査であったため、調査日数、調査面積とも制限された状況であったことから全体を把握することは非常に困難であったが、その事を冒頭に述べた上でその成果を簡略ではあるが以下のようにまとめとしたい。

まず調査地点であるが、津和野城下町遺跡4・5地点は、鹿足郡津和野町後田口66に所在する。この地点は元禄期の状況を描くとされる「津和野城下侍屋敷明細絵図」によると家中である中・上級武士層の屋敷地に相当し、本調査区が細野家（一部里田家）の屋敷地内であることがわかる。因みに細野家の役職は物頭で棒禄300石であった。

なお、この地区は嘉永の大火（嘉永6年、1853年）までは中・上級武士屋敷地であったと考えられるが、大火以降においては藩校養老館が移転されて明治を迎えることになる。そのことが、大正期に描かれた幕末の城下町絵図（栗本格齊筆）においても藩校養老館が描かれている。また、この絵図を見るかぎり本調査区は運動場の一部となっており建物等はなかったようである。

さらに明治以降において、堀酒屋として営まれていたが酒屋は火事により焼失して昭和6年以降はカトリック教会と保育園（幼稚園）として現在に至っている。

以上のような経過から、全体として近年の開発等により江戸時代の痕跡を確認することが困難であり、また、調査区が限られていたため遺構等を検出することが非常に難しい状況であった。また、平成9年に津和野城下町（祇園町区域）において発掘調査を実施した時には、江戸時代に火事が數度にわたりあったことが確認されているが、今回の調査では火事の痕跡が第2次調査区において2層しか確認することができなかった。また、第1次調査では確認されなかつたことは、上級武士の屋敷内の配置と深く関係しているのではないかと考えられた。さらに火事の痕跡が少ない原因の一つとして、建物が密集していない区域であったことが挙げられる。しかし、礎石等の建物に関わる遺構が僅か数ヶ所で検出されたのみであったため、建物全体を検証できる材料としては不十分であった。

遺構については前述したように成果は少なかったが、遺物については数多く出土している。その多くは瓦であり江戸初期から昭和のものまで出土している。そして同じように陶磁器類も数多く出土した。出土遺物の中には、以前調査した町屋区域では出土しない珍しい物や高価な陶磁器類が含まれていることが確認され、今回の調査区が上級武士階級の居住区域であるとされることが発掘調査の成果からも証明された。さらに文献等から判断して調査地が物頭で棒禄300石クラスの武士であることが分かっており、この階級の屋敷で使用されていた生活品が出土したことになるため、今後、城下町遺跡の調査が進むと階級別における生活品の比較ができるのではないかと考えられた。

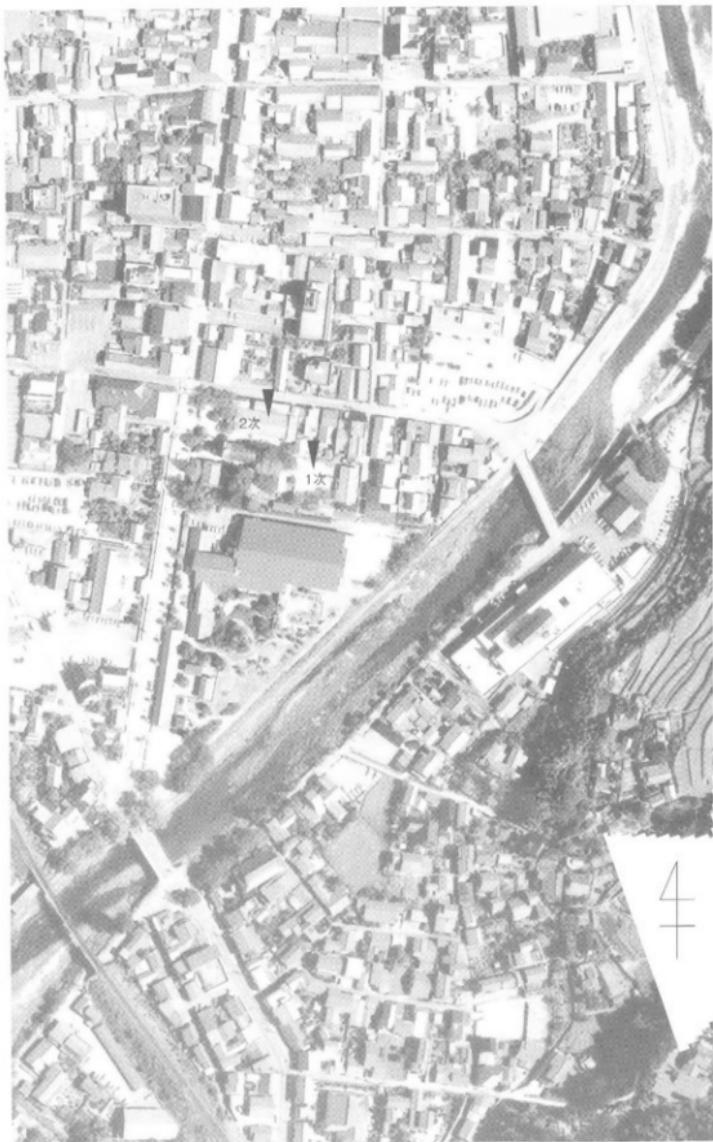
また、古いものとしては室町時代の陶磁器や土師器が確認されており、江戸時代の城下町形成以前に人々が住んでいたことが証明された。さらに出土遺物には中国製の青磁などが含まれており、吉見氏などの武士達が城の東側に中世城下町を造り移り住んできたことを裏付ける資料であると考えられた。また、第4節の遺物の項でも述べたが、中世期以前の出土遺物は皆無であった。このことは、本

調査地区が16世紀後半において整備された区域であったと言われる証拠の一つであろう。

今回の発掘調査により、城下町形成を考える上での資料が今までの文献資料に加え、新たな資料として今回の調査成果が役立つのではないかと思われた。しかし、一つ問題点として、今回の調査方法では多くの部分が現状保存できたが、部分的に発掘したため記録保存としては不十分な結果になったのではないかと思われた。津和野城下町を保護する上で今後の課題の一つとして考えていかなければならぬだろう。

#### 参考文献

- |                                       |                |
|---------------------------------------|----------------|
| 沖本常吉編『津和野町史』第一巻                       | 津和野町史刊行会 1970  |
| 沖本常吉編『津和野町史』第二巻                       | 津和野町史刊行会 1976  |
| 沖本常吉編『津和野町史』第三巻                       | 津和野町史刊行会 1989  |
| 『津和野城跡基本構想策定報告書』                      | 津和野町教育委員会 2003 |
| 『津和野城下町 祇園町遺跡』                        | 津和野町教育委員会 2003 |
| 第5図 元禄期の調査区周辺絵図は、元禄期 津和野城下侍屋敷明細絵図より引用 |                |
| 第6図 幕末期の調査区周辺絵図は、大正三年 津和野城下町絵図より引用    |                |



1. 調査地点鳥瞰



1. 第1次調査区近景（解体前）



2. 第1次調査区近景（解体後）



1. 第2次調査区近景（解体前）



2. 第2次調査区近景（解体後）



1. SE 1 (検出状況)



2. SE 1と調査区



3. SE 1の内部



1. 調査区 I-5 完堀状況



2. 調査区 I-11完堀状況（S E 2 検出状況）



1. 調査区 I - 13完堀状況 (S X 1 検出状況)



2. 調査区 I - 16完堀状況



1. 調査区 I-17 完堀状況（石列とレンガ敷検出状況）



2. 調査区 I-20 完堀状況



1. 調査区 I -24 完堀状況 (S X 2 検出状況)



2. 調査区 I -27 完堀状況



1. 試掘調査 C 区完堀状況 (S X 4 検出状況)



2. 調査区 II-1 完堀状況



1. 調査区 II - 2 完堀状況



2. 調査区 II - 3 完堀状況



1. 調査区 II-4 完堀状況



2. 調査区 II-5 完堀状況



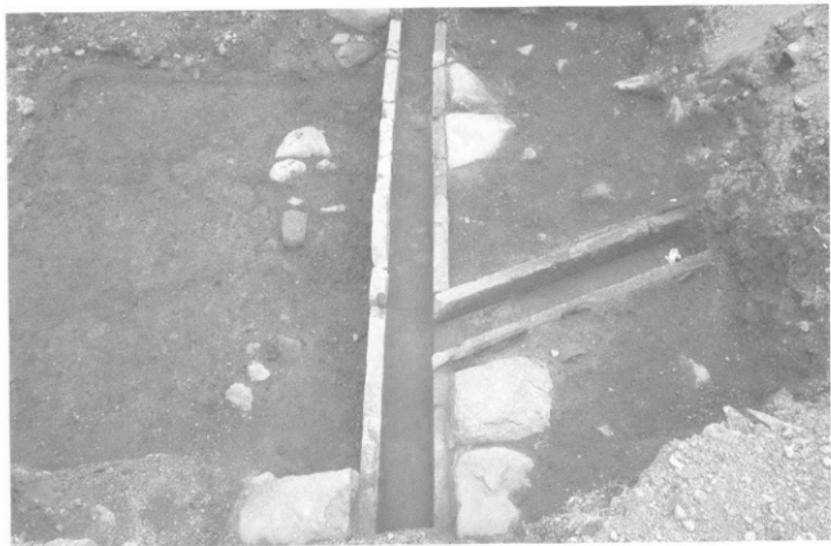
1. 調査区II-6 完堀状況



2. 調査区II-7 完堀状況



1. 調査区II-8 完堀状況（SD1検出状況）



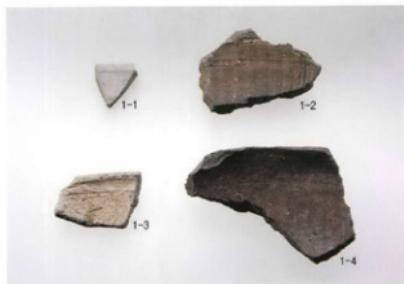
2. 調査区II-9 完堀状況（SD1検出状況）



1. 調査区 II-10 完掘状況 (S X 3 検出状況)



2. 井戸検出地点



図版15 出土遺物①



図版16 出土遺物②



図版17 出土遺物③



図版18 出土遺物④

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	つわのじょうかまちいせき 4・5 とのまちちく
書名	津和野城下町遺跡4・5 厳町地区
副書名	津和野幼花園改築工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	津和野町埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	中井将胤・麻野 遥・中野 萌
編集機関	津和野町教育委員会
所在地	〒699-5695 島根県鹿足郡津和野町後田口64-6 TEL 0856-72-1854
発行年月日	2010(平成22)年3月23日

—津和野幼花園改築工事に伴う発掘調査報告書—

**津和野城下町遺跡4・5**

**殿町地区 I**

2010年3月31日

編集 津和野町教育委員会

島根県鹿足郡津和野町後田口64-6

印刷 大村印刷株式会社

山口県防府市西仁井町1-21-55

